Ⅳ　高校生の規範意識

高校生はどのような行為を「よくない」と考え，また，どのような行為を「悪いことではない」と考えているのか。ここでは，さまざまの行為に対する善悪の判断に光をあてることにより，高校生の規範意識を明らかにしてみよう。規範意識は，行動選択を規定するひとつの要因であり，その意味で，現代高校生の行動様式を理解するひとつのポイントとなり得るからである。

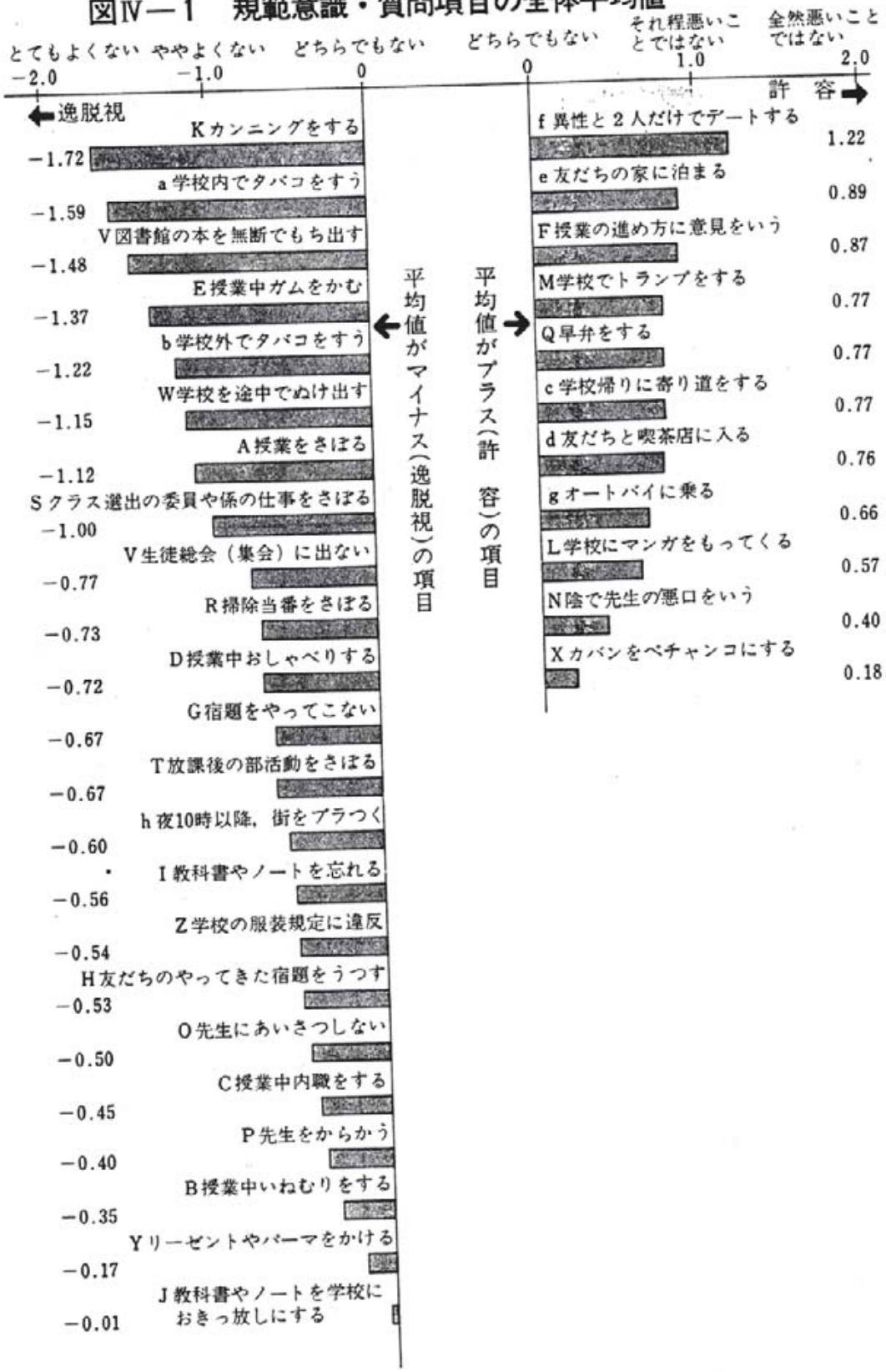
1　逸脱の許容度

今回の調査では，高校生の規範意識をとらえるために，34の項目を列挙し，それぞれに対し，「とてもよくない」から「全然悪いことではない」まで5段階で尋ねる方法をとった。

まず，質問に使用した34の項目と回答の平均値を，図Ⅳ－1により紹介しよう。数値は，小さい程，生徒たちがその項目を逸脱視（よくないと思う）していると読む。逆に大きな程，その項目を許容（悪くない）していることを示している。

質問を行ったこれらの項目は，さまざまな生活領域にわたっており，いずれもやや逸脱的なニュアンスを含んでいる。図Ⅳ－1をみて特に目につくのは，校内における行動よりも校外の行動に対して生徒が許容的なことである。とりわけ，「異性と2人だけでデート」「友だちの家にとまる」「友だちと喫茶店に入る」など，

図Ⅳ—1　規範意識・質問項目の全体平均値



異性や仲間との行動については，むしろ悪いことではないと考える傾向が目立っている。

ところで，図Ⅳ—1にあげた各項目をどの程度逸脱視するかは，生徒によりまちまちのはずである。そこで，規範意識分析の第1ステップとして，どういった生徒層で全体的な許容度が高く，あるいは低くなっているかを，大ざっぱに把握しておくことにしよう。

生徒の，全体としての逸脱の許容度を測定するために，数量化Ⅲ類による第Ⅰ軸を利用した（表Ⅳ—1）。数量化Ⅲ類により得られた表Ⅳ—1の尺度は，プラス方向が許容的な傾向を，マイナス方向が許容度の低い，逸脱視する傾向を表わしている。

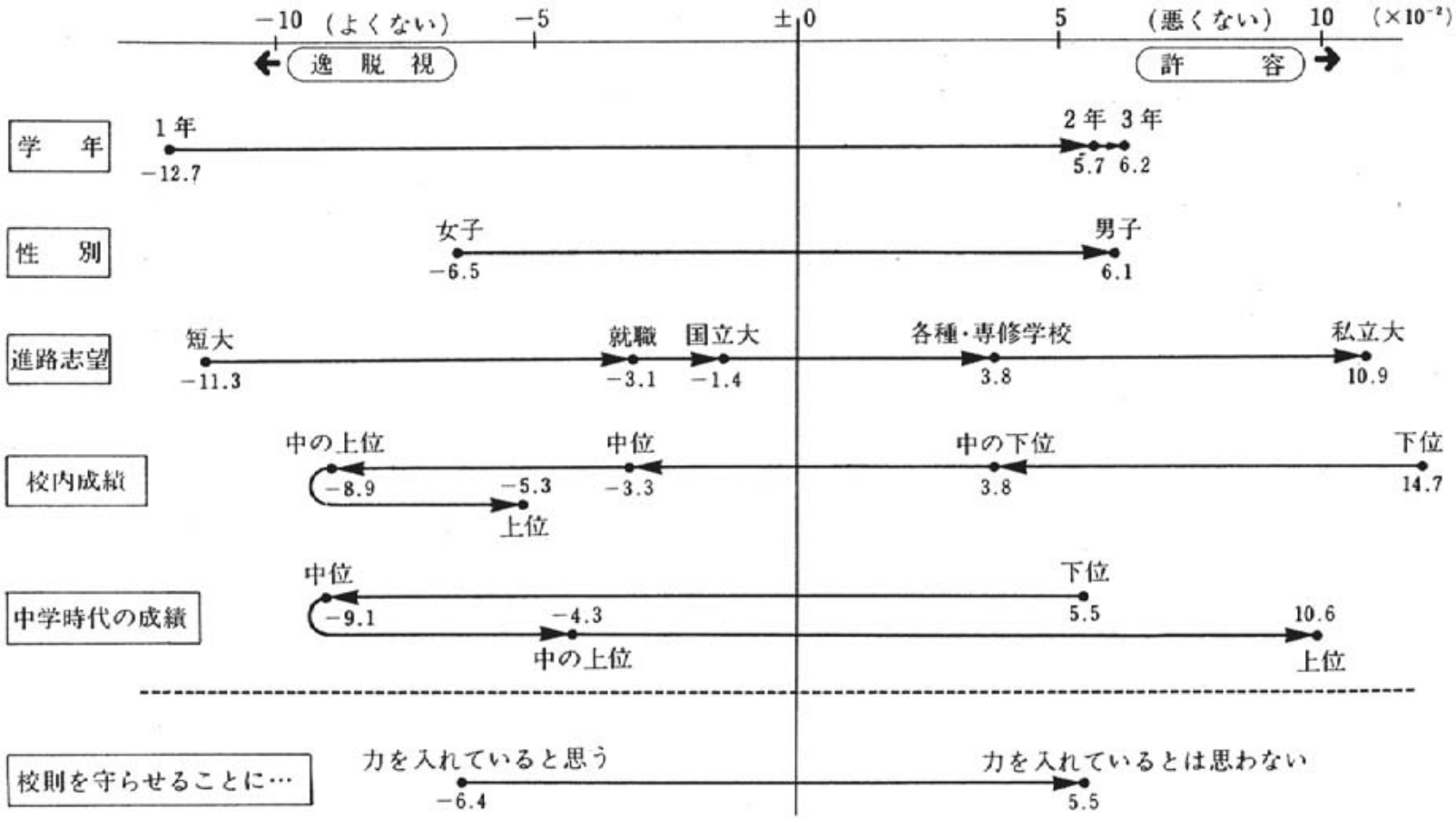
表Ⅳ—1　逸脱の許容度・数量化Ⅲ類によるカテゴリーウエイト

（Ⅰ軸・数値の大きなカテゴリーの抽出）

	変　　数	カテゴリー	数　値
許容度・低（逸脱視）	異性と2人だけでデートする	よくない	−1.97
	学校帰りに寄り道をする	よくない	−1.86
	友だちと喫茶店に入る	よくない	−1.85
	友だちの家に泊まる	よくない	−1.71
	学校でトランプをする	よくない	−1.70
	早弁をする	よくない	−1.69
	学校にマンガをもってくる	よくない	−1.58
	⋮	⋮	⋮
	（中　　略）		
	⋮	⋮	⋮
↕	クラス選出の委員や係の仕事をさぼる	悪くない	2.75
許容度・高（許　容）	授業をさぼる	悪くない	2.80
	授業中ガムをかむ	悪くない	2.86
	学校を途中でぬけ出す	悪くない	2.96
	図書館の本を無断でもち出す	悪くない	3.15
	学校内でタバコをすう	悪くない	3.30
	カンニングをする	悪くない	3.62

図Ⅳ—2　逸脱の許容度・サンプルスコアの平均点

（数量化Ⅲ類の第Ⅰ軸）



分析結果を示したのが図Ⅳ－2である。図中，マイナスのスコアの高いグループほど逸脱視する傾向が大きく，逆にプラスのスコアの高いグループほど許容的である。

まず学年別にみると，学年の上昇に伴い，許容的傾向が強まる。とくに中学校を卒業して間もない1年生は極端に許容度が低く，2年生との差は大きい。2年生と3年生の間に大きな差はない。高校へ入学してから2年生になるまでの1年間に，行動の善悪を判断する基準が急激にゆるやかになり，許容的な意識が形成されることを示している。

男女間にも大きな差異がある。女子は許容度が低く逸脱視する傾向が大きいのに対し，男子は許容的である。

校内での成績別にみると，おおむね上位者ほど逸脱視する傾向がみられる。ただし，最も逸脱の許容度が低いのは成績が中の上位の生徒たちであり，最上位者はやや許容度が高くなっている。

中学時代の成績は，高校内の成績とは異なる動きを示している。中学時代に中位の成績であった者の許容度がもっとも低く，上位および下位であった者の許容度が高くなっている。この結果は，学校の行う指導の重点の相違が影響していると考えられる。一般的にいって，中学時代に成績が中位の生徒たちは，受験指導や校則を守らせることに熱心な，進学率の中位の高校に進学することが多い。今回の調査からも，進学率が中位のBグループの高校では，進学率が高いAグループや就職志望者の多いCグループの高校よりも，受験指導や校則を守らせることに重点がおかれているという結果が出ている（巻末集計表Q8を参照のこと）。

つまり，

①中学時代，成績中位の生徒は，進学率中位のBグループの高校に進学する。

↓

②Bグループの高校では受験指導や校則を守らせることに重点をおいている。生徒にとってはA・Cグループの高校よりも，学校による行動の規制が大きい。

↓

③この結果，Bグループ生徒の逸脱の許容度が低くなる。

というルートが推測される。この推測を裏づけるように，学校は校則を守らせることに，力を入れていると答えた生徒ほど，逸脱の許容度が低く，設問にあげた行動を「よくない」と考える傾向が強くなっている。

ここでもうひとつ注目しておきたいのは，学校のおこなう行動の規制が大きくなれば，それだけ，生徒の逸脱の許容度が低くなるという図式が見い出されたことである。行動の規制が大きくなればなるほど反発感が増し，逆に，よくないとされる行動に対し，逸脱視せず許容的になる――少なくともこのデータを見る限

り，そうした図式は発見できない。学校が校則などを通じ「いけない」と規定した行為に対しては，そのまま受け入れ「いけない」と考える素直で従順な高校生像が顔をのぞかせている。

2　規範意識の構造

1)　規範意識の領域分類

このように，入学間もない1年生，女子，成績上位者，それに中学時代の成績が中位の生徒たちに，全体として逸脱の許容度が低い傾向がみられた。

しかし，ここまでは，34の設問全体に対する許容度を問題としていたために，より細かな規範意識の構造は明らかにされなかった。図Ⅳ－1にあげた34の項目に対し，生徒は必ずしも1本の「モノサシ」でその善悪を判断しているわけではないだろう。34の質問項目を，生徒たちの意識にそった形でいくつかの領域に分け，その領域ごとに，生徒の逸脱の許容度がどうなっているのか見ていく必要がある。そこで，因子分析の手法のひとつである，バリマックス法を用いて分析を進めることにしよう。バリマックス法は，回答者の意識の中での分類に忠実な形で，調査者が多数の質問項目を分類しようとする時，有効な手法である。詳しい説明は専門書にゆずるが，互いに相関の高い質問項目同士をグループにまとめ(このグループを因子と呼ぶ)，いくつかの質的に異なる因子を質問項目から抽出するのである。

バリマックス法の適用の結果，表Ⅳ－2の通り5つの因子が抽出された。主として校外における行動から成る〈ユースカルチャー〉，委員の仕事，掃除当番の〈校内義務〉，授業態度や宿題に関わる〈勉強〉，伝統的な非行につながる〈喫煙〉，校内でのトランプ，マンガの持ちこみを意味する〈校内遊戯〉――以上，規範意識を5つの領域に分類することができたわけである。

同一の因子に分類された行動は，生徒が「よくない」「悪いことではない」の判断をする時，同じような判断を下すことを意味する。たとえば，「友だちと喫茶店に入る」と，「異性と2人だけでデートする」はいずれもユースカルチャー因子に含まれている。この意味するところは，友人と喫茶店に入るのがよくないことだと考える生徒は，デートもやはりよくないことだと考える傾向があるということである。つまり，両者は生徒の意識の中で同じ行動選択の基準によって判断されていることを意味する。

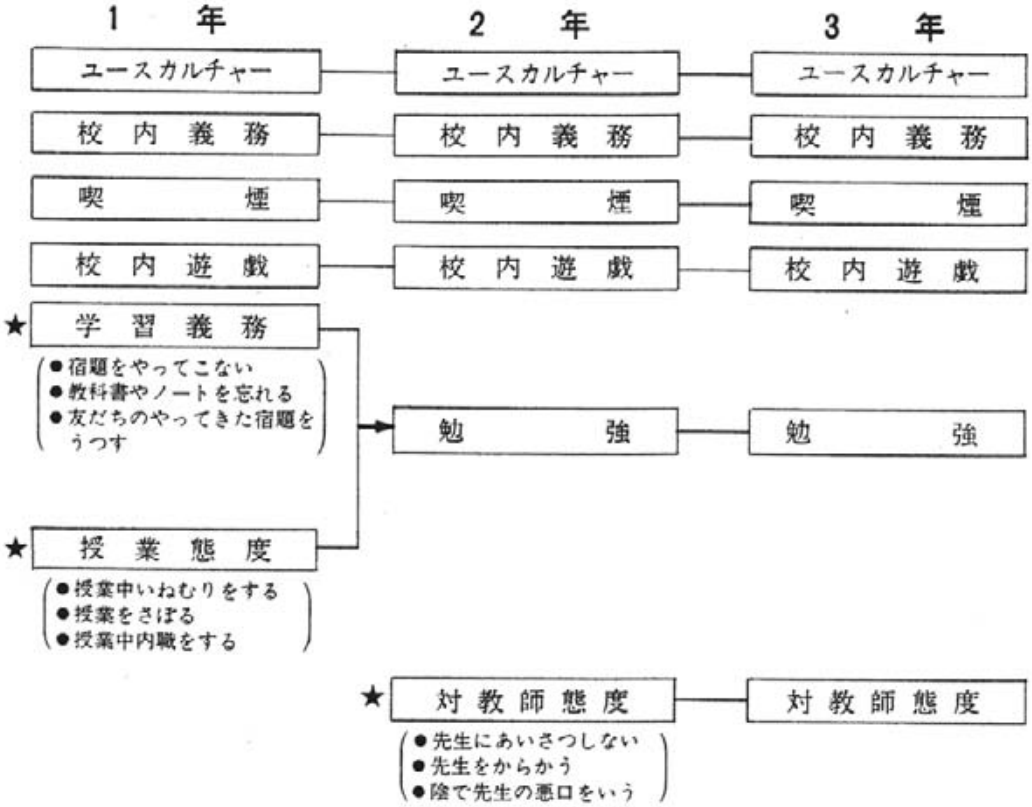
逆に，異なる因子に含まれた行動同士は，全く別の行動選択の基準によって判断されることを意味する。たとえば，喫煙因子に含まれる「学校外でタバコをすう」と，ユースカルチャー因子に含まれる「リーゼントやパーマをかける」とは相関が小さいことを示している。リーゼントやパーマを許容する生徒が校外での

表Ⅳ—2　規範意識の構造(バリマックス法による因子の抽出)

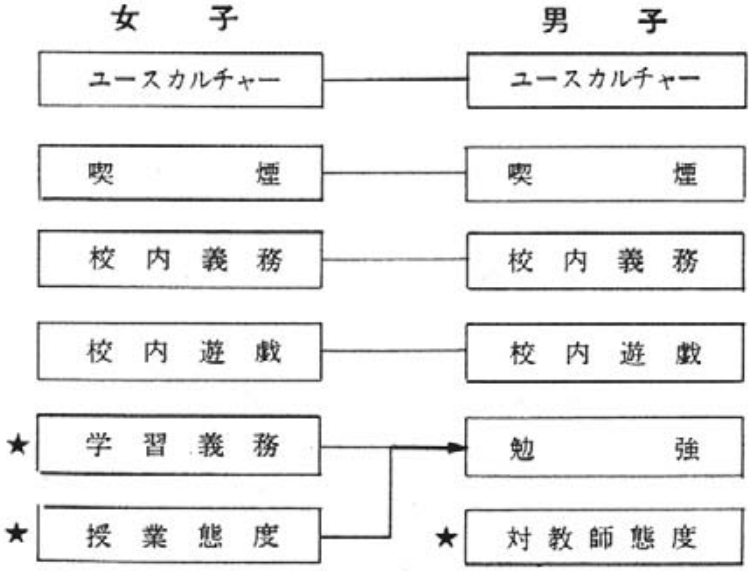
	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
因子の名前	ユースカルチャー(校外)	校内義務	勉強	喫煙(伝統的非行)	校内遊戯
因子を特徴づける変数	友だちと喫茶店に入る (.75) 友だちの家に泊まる (.70) 学校帰りに寄り道する (.69) 異性と2人だけでデートする (.67) リーゼント・パーマをかける (.62) オートバイに乗る (.62) カバンをペチャンコにする (.58)	クラス選出の委員や係の仕事をさぼる (.77) 掃除当番をさぼる (.70) 生徒総会(集会)に出ない (.64)	授業中いねむりする (.61) 授業中内職をする (.61) 宿題をやってこない (.60) 友だちのやってきた宿題をうつす (.60) 教科書やノートを忘れる (.51)	学校内でタバコをすう (.75) 学校外でタバコをすう (.69) 学校を途中でぬけ出す (.51)	学校でトランプをする (.73) 学校にマンガをもってくる (.71)

注)(　　)内の数値は構造ベクトル。つまり，各変数がどの程度その因子の性質と関連があるのかを示す。

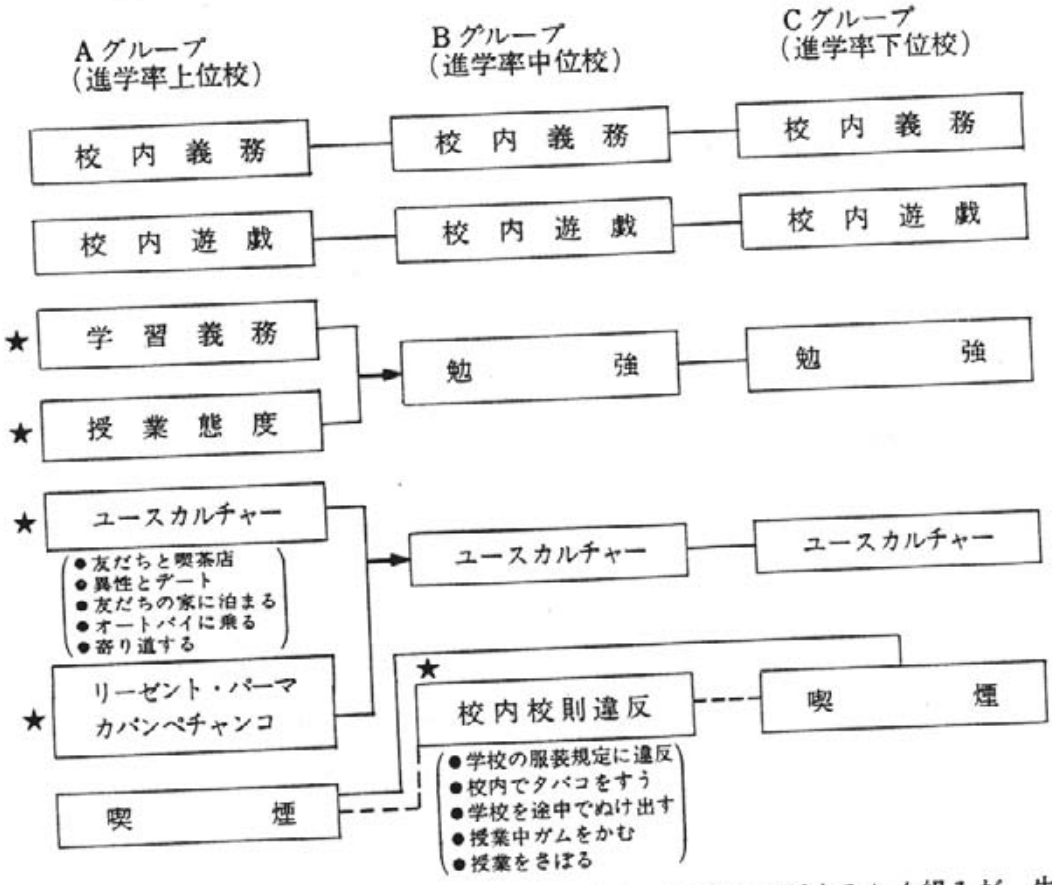
図Ⅳ－3　学年別規範意識の構造



図Ⅳ－4　性別規範意識の構造



図Ⅳ－5　学校グループ別規範意識の構造



タバコにも許容的であるとは限らないのである。両者を判断するわく組みが，生徒の意識の中では別々に存在していることを物語っている。

ここで，話は少し脇道にそれるがページをさいて，属性グループ別に，規範意識がどのような領域に分類されるのかみておこう。

属性グループごとにバリマックス法を適用し，その結果を示したのが図Ⅳ－3～5である。主な結果をまとめると次のようになる。

〔学年別　図Ⅳ－3〕

① 1年と2・3年の間で異なる因子が抽出された。勉強因子が1年生では，〈学習義務〉（宿題や忘れ物）と〈授業態度〉の因子にまだ分かれている。2・3年生は，宿題をやることも授業をまじめに聞くことも，同じ「勉強」のカテゴリーと考えるのに対し，1年生は，別のことと考える。

② 2・3年生になると，「先生にあいさつしない」「先生をからかう」「陰で先生の悪口をいう」の3つの行動が〈対教師態度〉というひとつの因子を構成するようになる。すなわち，1年生の時には，3つの行動間の相関が，低かっ

たものが，2・3年生になると高くなる。先生にあいさつしないことを悪いことではないと考える生徒は，同時にからかったり悪口をいうことも悪いことではないと考えるという具合に，〈対教師態度〉における生徒の分化が2・3年生になると明確になるのである。

③ 以上を，先に示した逸脱の許容度の1年→2・3年の大きな変化と考えあわせると，高校へ入学してから1年間は，大幅な規範意識の変化のおこる時期であるといえる。

〔性別　図Ⅳ－4〕

① 男子における〈勉強〉因子が女子では，〈学習義務〉と〈授業態度〉の2因子に分かれている。

② 男子には〈対教師態度〉因子が析出される。

〔学校グループ別（進学率別）　図Ⅳ－5〕

① B・Cグループにおける〈勉強〉因子が，Aグループでは〈学習義務〉と，〈授業態度〉の2因子に分かれている。

② B・Cグループにおける〈ユースカルチャー〉因子が，Aグループでは，「リーゼントやパーマをかける，カバンをペチャンコにする」因子と，その他のユースカルチャー因子に分かれている。B・Cグループでは，「リーゼントやパーマをかける，カバンをペチャンコにする」が，「友だちと喫茶店に入る」ことと同じ行動カテゴリーに含まれるのに対し，Aグループの生徒にとっては，両者は異なる行動のカテゴリーを構成するのである。

③ Bグループでは特殊な因子として〈校内校則違反〉因子が析出される。「校内でタバコをすう」ことがA・Cグループでは「校外でタバコをすう」ことと同一のカテゴリーでとらえられていたのに対し，Bグループでは，学校の服装規定に違反するなどの校内校則違反行動と同じカテゴリーの中に位置づけられているのも特徴的である。Bグループの学校では校則を守らせることに力を入れるなど，行動の規制が他グループよりきびしいことを先に述べたが，そうした学校の教育面の特色が他グループには見られない〈校内校則違反〉因子が析出される基盤にあると考えられる。

2）領域ごとの逸脱の許容度

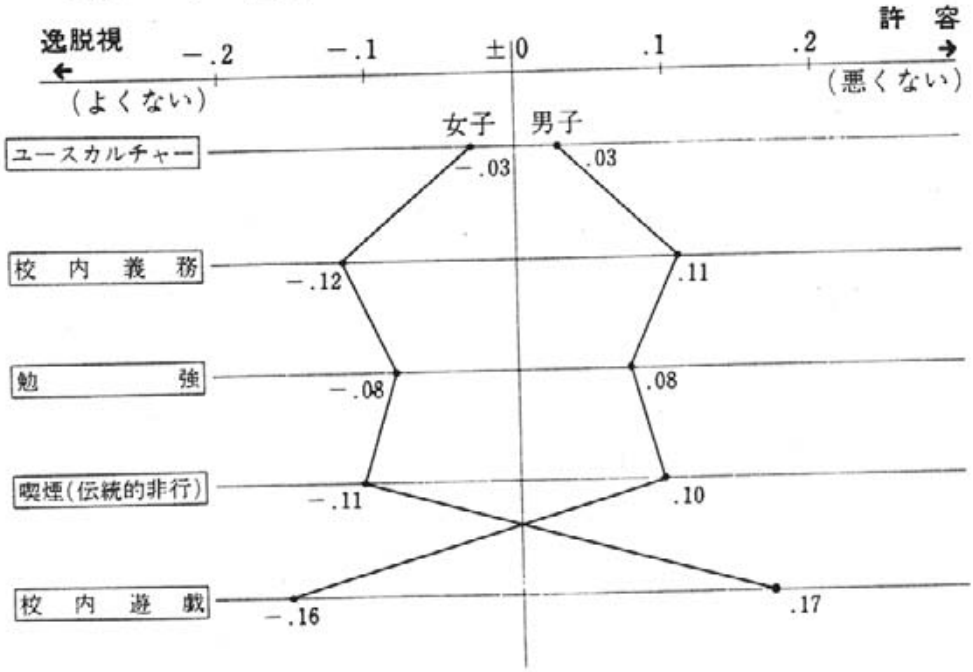
こうして，高校生たちは，学年，性，学校グループによって，微妙に異なる規範意識の構造をもっていることがわかった。この相違は，そもそも，行動の善悪を判断する際に，属性により異なる意味づけを行っていることを示唆している。たとえば，A・Cグループの生徒たちにとって，校内で喫煙することは校外で喫

煙することと同じような意味をもつのに対し，Bグループの生徒にとっては服装規定違反と似かよった，校則違反行動としての意味を帯びている。

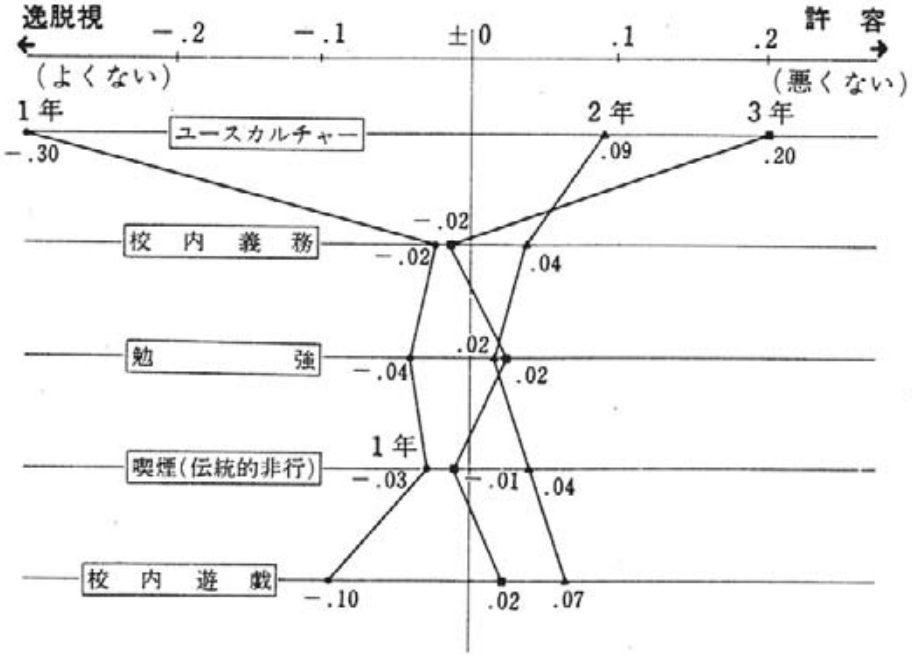
しかし，ここでは話を元に戻し，高校生に共通の規範意識の構造として，表Ⅳ－2に示した〈ユースカルチャー〉〈校内義務〉〈勉強〉〈喫煙(伝統的非行)〉〈校内遊戯〉の5因子を考え，分析を進めることにしよう。

高校生たちは，5つに分類された領域ごとに，どのような逸脱の許容度を見せるだろうか。

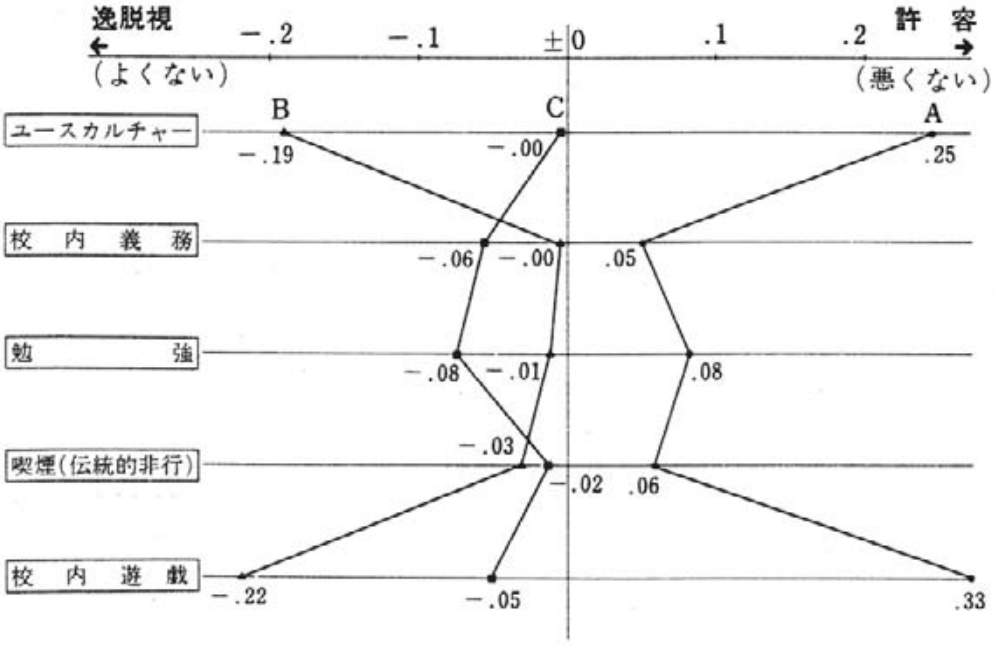
図Ⅳ－6　因子スコアの性別比較



図Ⅳ－7　因子スコアの学年別比較



図Ⅳ－8　因子スコアの学校グループ別比較



まず，性別，学年別に差異をみたのが図Ⅳ－6，図Ⅳ－7である。図で左側へ行くほど（マイナス方向）逸脱視する傾向が，右側へ行く程（プラス方向）許容的な傾向が大きなことを表わしている。

性別にみると，校内遊戯を除いて女子の方が逸脱視する（よくないと思う）傾向が大きい。クラス選出の委員の仕事や掃除当番をさぼらず（校内義務），授業態度や宿題の提出状況も良好で（勉強），タバコとは縁が薄い（喫煙）といった，いわば一般的な女子高校生のイメージがほぼそのまま映し出されている。

学年別に大きな差異があるのは，ユースカルチャーと校内遊戯である。いずれも，1年生で逸脱視する傾向が顕著になっている。この2つの因子に含まれる行動は，中学校時代には経験できないものが多いことから考えて，入学して間もない1年生が依然として「してはいけないことだ」と考えているのも当然かもしれない。しかし，そうした1年生が1年後にはガラリと変身し，ユースカルチャーや校内遊戯に対して許容的な規範意識を身につけるようになるのを，グラフは如実に示している。

では，学校グループ別（進学率別）にみると，どうか。（図Ⅳ－8）

ユースカルチャーと校内遊戯の因子でグループ間差異がきわめて大きくなっているのが目立つ。両者とも，最も許容的なのは進学率が高いAグループの学校に在学する生徒たち，最も逸脱視しているのは，進学率中位のBグループの学校の生徒たちである。進学率が低いCグループの生徒たちは，この2つの因子については中間的な許容度を示している。

許容度の最も低いBグループの学校の生徒たち――すでに述べたように，なぜBグループの生徒たちが，かくも激しい逸脱視の姿勢を見せているのかを考えるとき，Bグループの学校の教育面の特色に突き当たらざるをえない。つまり，Bグループの学校を全体としてみた時，A・Cグループに比べ，受験指導や規則を守らせることに熱心だという教育面の特色をもっている。この特色が，生徒の許容度の低さ――とくに，ユースカルチャーや校内遊戯に対する逸脱視（よくないと思う）傾向を大きくしているのではないかという仮説に到達せざるをえない。この仮説をめぐって，いま少しデータを確認してみよう。

① まず，ユースカルチャー，校内遊戯に対する，Bグループの生徒がA・Cグループの生徒に比べ，著しく逸脱視する傾向があることは図Ⅳ－8から明らかである。

② 生徒自身の目からみると，Bグループの学校の教育面の特色は，受験指導，校則を守らせることを重視し，相対的にクラブ・部活動，行事などの生徒活動を軽視しているところにある（表Ⅳ－3）。

表Ⅳ—3　学校の教育面の特色・学校グループ別比較

（%）

	Aグループ		Bグループ		Cグループ
受験指導	59.5	<	69.8	>	55.0
校則を守らせること	3.5	<	71.5	>	57.7
クラブや部活動	42.6	>	36.5	<	56.7
体育祭・文化祭などの行事	57.8	>	34.6	<	47.6

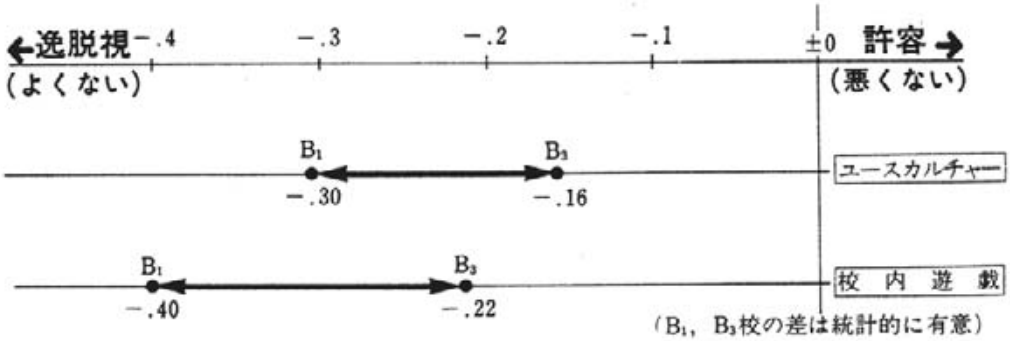
（注）数字は，各項目に学校が力を入れていると答えた者の比率

③　①，②からBグループの学校では，受験指導，校則を守らせることに力を入れている所が多いゆえに，生徒の逸脱視（よくないと思う）傾向を大きくしているという仮説が導かれる。

④　仮に，③の仮説が正しいとすれば，同じBグループの学校の中でも，受験指導・校則を守らせることに重点をおく学校とそうでない学校では逸脱の許容度に差があり，重点をおく学校の方が逸脱視する傾向が大きくなっているはずである。

⑤　④を図Ⅳ—9により確認してみよう。

図Ⅳ—9　因子スコア・B_1校とB_3校の比較



（B_1，B_3校の差は統計的に有意）

項目		B_1		B_3
生徒の学力の水準	国公立大学志望率（%）	61.9		59.7
	中学時代の成績	1.83		1.90
教育面の特色	規則を守らせることに力を入れていると思う（%）	96.0	>	50.9
	受験指導に力を入れていると思う（%）	96.0	>	59.5
	クラブや部活動に力を入れていると思う（%）	30.1	<	46.1
	体育祭や文化祭などの行事に力を入れていると思う（%）	4.3	<	56.3

注）中学時代の成績——Q13の回答を平均値で示した。
数値が小さいほど，成績が上位であったことを示す。

B_1とB_3は同じBグループの学校であり，生徒の学力水準もほとんどかわらない。規則を守らせることや受験指導に重点をおくB_1校の方が，そうでないB_3校よりも，ユースカルチャー，校内遊戯のいずれの側面においても逸脱視する傾向を示し，B_3校は許容的になっている。

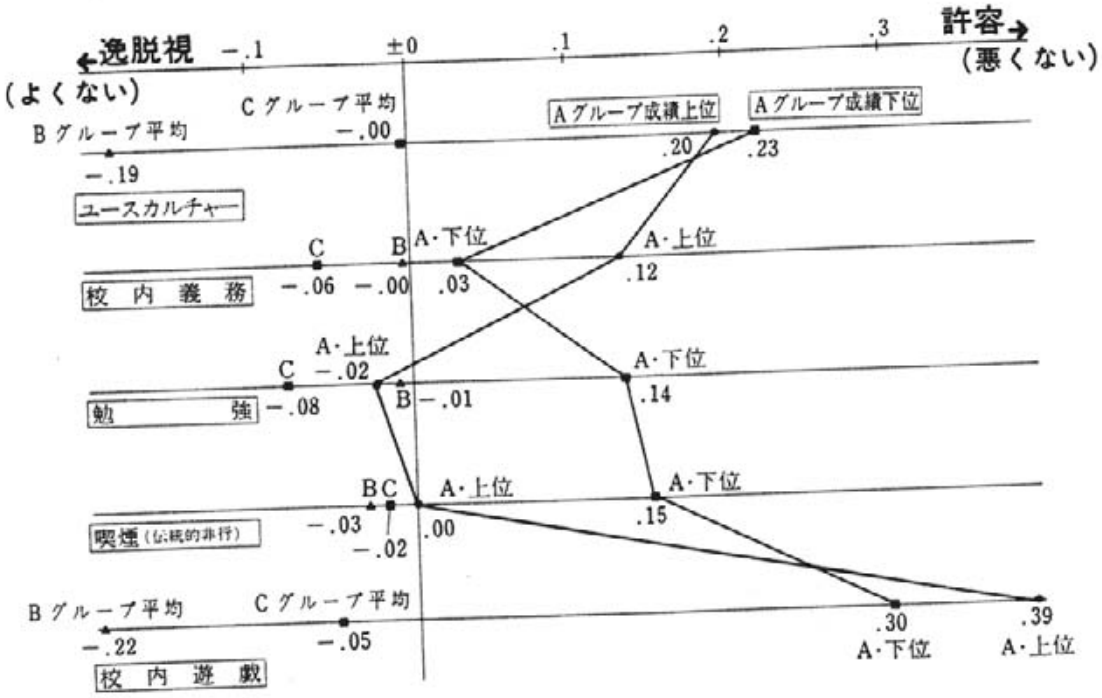
⑥ ⑤より，④で予測された結果は確認される。

これだけのデータでは必ずしも十分とはいえないが，学校の教育面の特色もまた，逸脱の許容度に影響を与えるとみてよさそうである。考えてみると，受験指導や校則に力を入れるということは，学校が要求する望ましい行動を生徒に明示することであり，同時に，その行動への同調を生徒に促す報酬や罰を数多く準備することである。すなわち，受験指導や校則を重視する活動によって，生徒は学校から規範を提示され，それへの同調に方向づけられるのである。

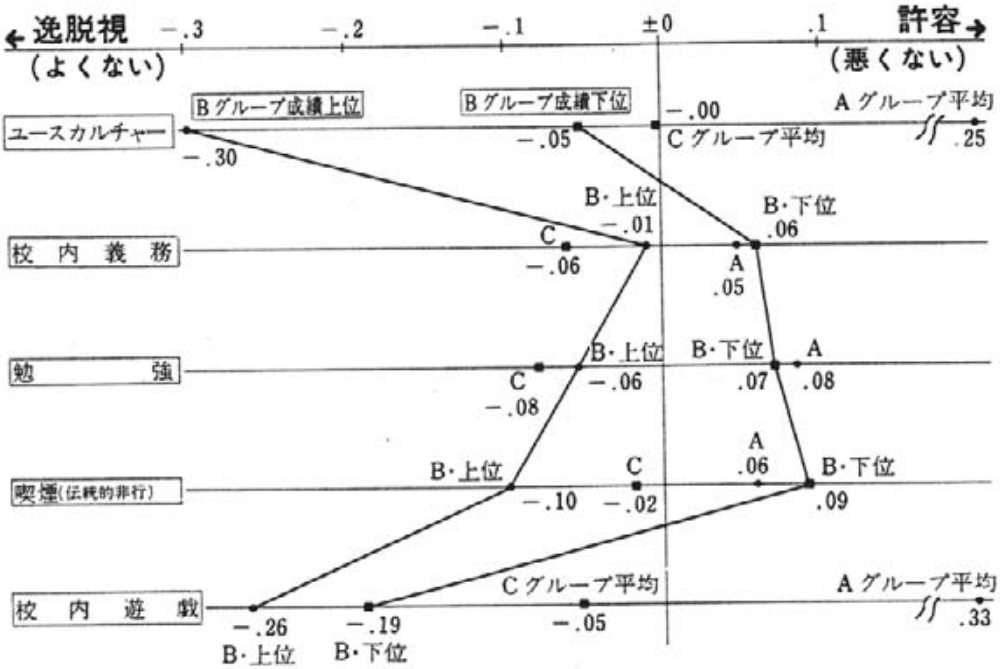
このメカニズムの中に，学校が生徒の規範意識をより望ましい方向にリードしていける可能性が潜んでいると同時に，生徒の自律性を奪い，学校の提示する規範への過剰同調をもたらす危険性もはらんでいるといえよう。

次に，校内における成績と5つの因子に対する許容度との関連をみてみよう。（図Ⅳ—10, 11, 12）

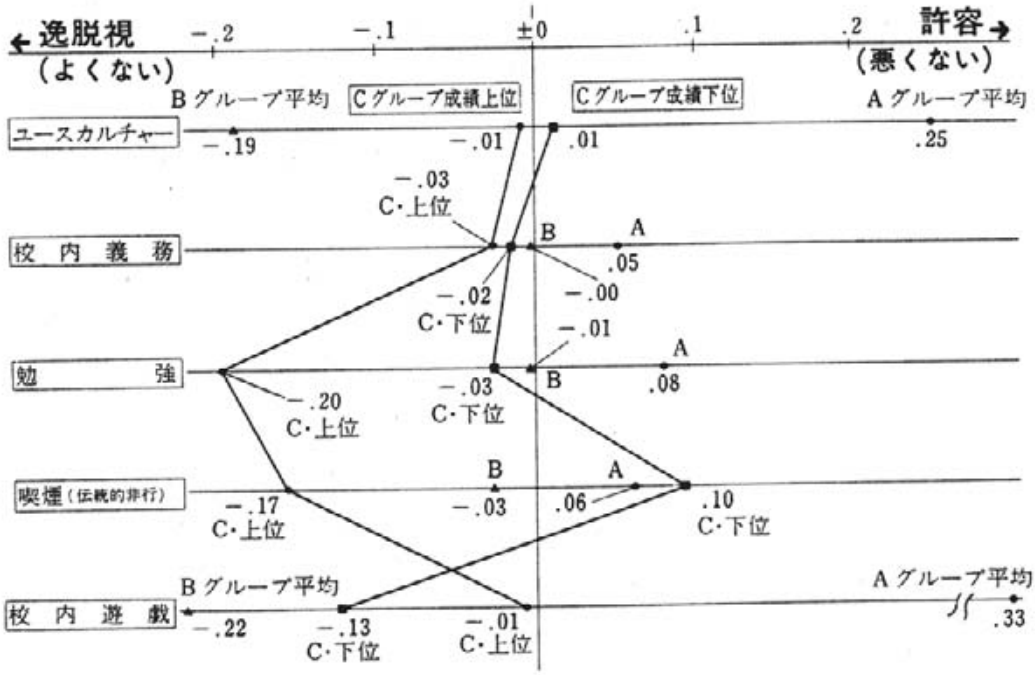
図Ⅳ—10　因子スコアの成績別比較 (1)Aグループの学校



図Ⅳ—11　因子スコアの成績別比較(2)Bグループの学校



図Ⅳ—12　因子スコアの成績別比較(3)Cグループの学校



ごく大ざっぱにいって，どの側面についても成績上位者ほど逸脱視する傾向がある。とりわけ，Bグループの学校の生徒において，成績の上下による規範意識の分化が進行している。A・Cグループでは，勉強と喫煙の側面でのみ，成績による顕著な差異がみられ，他の側面では，やや差がある程度である。成績下位者の方が勉強に関わる逸脱行動，喫煙を許容する傾向がある。

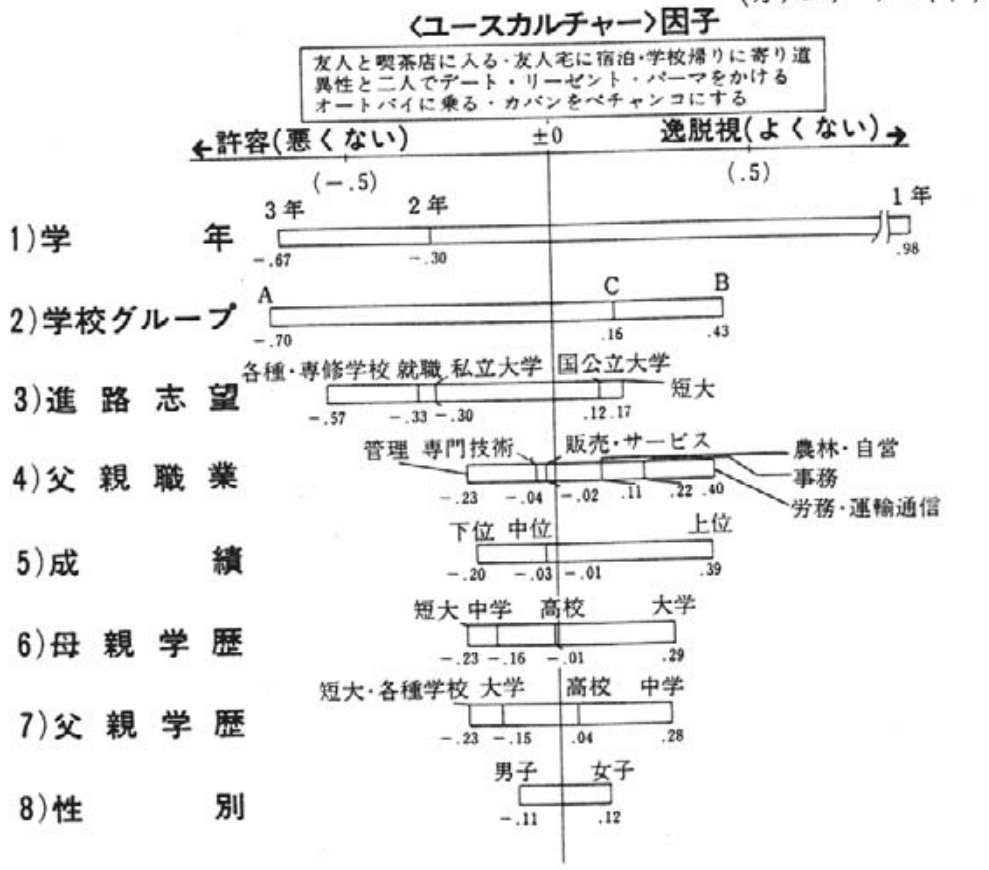
3　ユースカルチャーの許容度をめぐって

1）ユースカルチャーの許容度

最後に，規範意識の5つの側面のうち，とくにユースカルチャーに焦点をあてて，ユースカルチャーを逸脱視する生徒たちと，許容する生徒たちの相違を，属性，意識，行動の側面から浮き彫りにしておきたい。分析には，とくに逸脱視する傾向の大きな生徒と，許容する傾向の大きな生徒を，それぞれ約30%ずつ抽出して用いる。前者を〈逸脱視群〉，後者を〈許容群〉と呼んでおく。

図Ⅳ—13　〈ユースカルチャー〉因子・許容度を規定する属性

（数量化Ⅱ類による カテゴリーウエイト）



まず，ユースカルチャーの許容度を規定する属性要因を知るために，数量化II類による分析を行った。この分析からわかるのは，いったいどのような属性要因によってユースカルチャーの逸脱視群，許容群の分化が規定されているかである。結果は図Ⅳ－13に示されている。許容度の大きさを規定する力の大きな順に，上から８つの属性を並べている。図中，１年，２年などの属性カテゴリーに付した数値は，大きいほど逸脱視群と近い関係にあることを，小さいほど許容群と近い関係にあることを示している。図Ⅳ－13から，次のように逸脱視群，許容群の最も典型的なプロフィールを描くことができる。

ユースカルチャー逸脱視群

１年生，進学率中位（Ｂグループ）の学校の生徒，短大・国公立大学志望，父親の職業＝労務・運輸通信，校内成績上位。

ユースカルチャー許容群

３年生，進学率上位（Ａグループ）の学校の生徒，専修学校・就職・私立大学志望，父親の職業＝管理職・専門技術職，校内成績下位。

２）逸脱視群，許容群の意識と行動

ユースカルチャーに対する逸脱視群，許容群の間には，校内，校外における行動，学校に対する意識について次のような差がある（表Ⅳ－４，表Ⅳ－５）。

表Ⅳ—４　ユースカルチャーの許容度と生活時間

単位・分

	逸脱視群		許容群
勉強時間	127.6 (76.2)	>	108.8 (71.2)
外出時間（外での遊び ショッピング）	92.3 (58.5)	<	97.6 (64.0)
N	1,044		1,070

注）　（　　）内は標準偏差

勉強，外出ともに，両群の間には，統計的に有意な差がある。

表Ⅳ—5　ユースカルチャーの許容度と意識・行動

(%)

ユースカルチャーの許容度 ＼ 意識と行動	逸脱視群		許容群
家で予習・復習をする	88.8	>	79.2
夏休み前など勉強の計画をたてる	66.3	>	59.2
学校を休みたいという気持ちになる	42.9	<	66.2
先生に反発を感じる	45.6	<	69.2
この学校の生徒であることは誇り	54.1	>	45.0
学校で異性と話す	56.2	<	78.1
学校帰りに友だちと街をぶらつく	28.3	<	52.1
ラジオの深夜放送やDJを聞く	52.4	<	64.2
フォークやロックのコンサートに行く	12.3	<	32.9
休みの日は1日中家にいる	72.3	>	59.4
N	1,040		1,074

注）数字は,「よくある」「ときどきある」の比率を合計したもの。

① 逸脱視群の方が勉強時間が長く，家で予習・復習する習慣があり，夏休み前にはきちんと勉強の計画をたてる者が多い。

② 逸脱視群の方がその学校の生徒であることを誇りであると感じ，先生に反発を感じたり学校を休みたいと思うことは少ない。

③ 許容群の方がショッピングなど外出時間が長く，異性と学校で話す，学校帰りに友人と街をぶらつく，深夜放送を聞く，フォークやロックのコンサートに行くなどの行動をとることが多い。

こうしてみると，ユースカルチャーに対し許容的な生徒たちは，勉強への関与の度合いが低く，どちらかといえば学校への不適応症状を呈している一方で，生活の中心が仲間との遊びや校外生活にあるようにみえる。ユースカルチャーを逸脱視する生徒たちは，その逆で，勉強への関与，学校への適応度が高いという特徴をもっている。

わずかずつではあるが，逸脱視群，許容群のイメージが浮かびあがってきた。さらに,両群の生徒たちが,学校生活についての状況設定型の質問（Q７・第Ⅲ章で既述）の中で,どのような行動を選択しているのか,ながめてみることにしよう。

表Ⅳ－６からわかるように以下のようなかなり顕著な差異が両群の間に認められる。

表Ⅳ—6　ユースカルチャーの許容度とQ7

(%)

設　問	選　択　別	逸脱視群		許容群
朝，頭痛と熱37°……	大事をとって学校休む	28.7	<	39.5
	無理してでもいく	71.1	>	60.2
受験に関係ないし，退屈な授業……	おしゃべり，いねむり，内職	51.6	<	78.5
	まじめに授業うける	47.9	>	21.2
眠い授業，今日はもうあたらない……	本にかくれて眠ってしまう	28.7	<	62.6
	目をこすってでも起きている	71.0	>	37.2
テストで前の人の答がみえた……	その答をかいておく	34.2	<	50.6
	人の答は写さない	65.1	>	48.7
答案，まちがった答が○に……	先生に申し出る	45.8	>	31.8
	そのまま黙っている	53.9	<	67.8
仲の良い友人に代返をたのまれた……	ひきうける	42.4	<	69.4
	断わる	57.1	>	30.2
ひとり旅を計画，しかし，担任の先生から禁止……	計画どおり旅に出る	47.7	<	83.7
	とりやめる	52.2	>	16.3
デートを約束，しかし，他校生との男女交際は禁止	ひそかにデート	77.6	<	97.5
	あきらめる	21.5	>	2.2

注）無回答は省略

① ユースカルチャーに対する逸脱視群は，まじめで誠実。常に授業態度を崩そうとしない。むしろ，まじめすぎて，仲の良い友人からの代返も断わるような融通のなささえのぞかせている。学校の指示には従順で，計画していたひとり旅やデートの約束も，禁止されれば諦めてしまう。

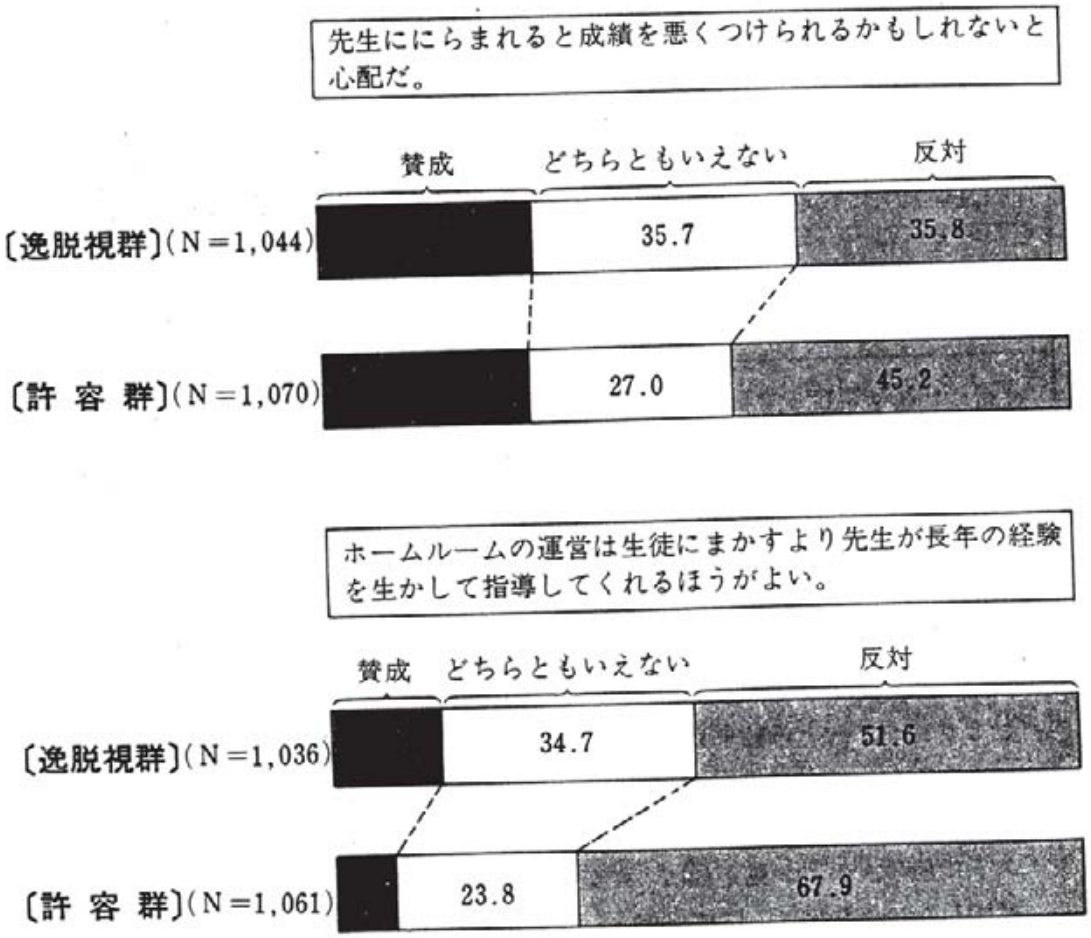
② 一方，ユースカルチャーに対する許容群は，およそ対照的な行動を選択している。授業への関与は打算的であたらないとわかれば眠ってしまうし，テストで前の人の答が見えれば，平気で書くずるがしこさをもちあわせている。計画したひとり旅は，学校が何といおうと実行するし，彼女とのデートも断固決行する。

これらの結果を総合してみると，〈学校適応，勉強家，まじめ，誠実，従順〉という逸脱視群の特徴と，〈学校不適応，打算的な授業への関与，ふまじめ，ずるさ，反抗的〉という許容群の特徴が鮮やかに浮かびあがってくる。しかし，あえて私見を述べるならば，高校生の鏡のような逸脱視群の特徴を示す数字の背後には，融通性のなさ，覇気のなさ，自律性のなさが，逆に許容群の特徴の背後には，柔軟

性，自己貫徹，自律性が存在しているように思えてならないのである。

もちろん，許容群が選択している行動はむしろ問題と見なされるべきであろうし，ここで行った考察は，調査票から得られたデータのみに依存しているため，現実の生徒像とは多少のズレがあるかもしれない。しかし，ユースカルチャーに対する逸脱視群，許容群は，ここまで指摘してきた行動や意識の諸特徴を色濃く帯びていることは確かなのである。

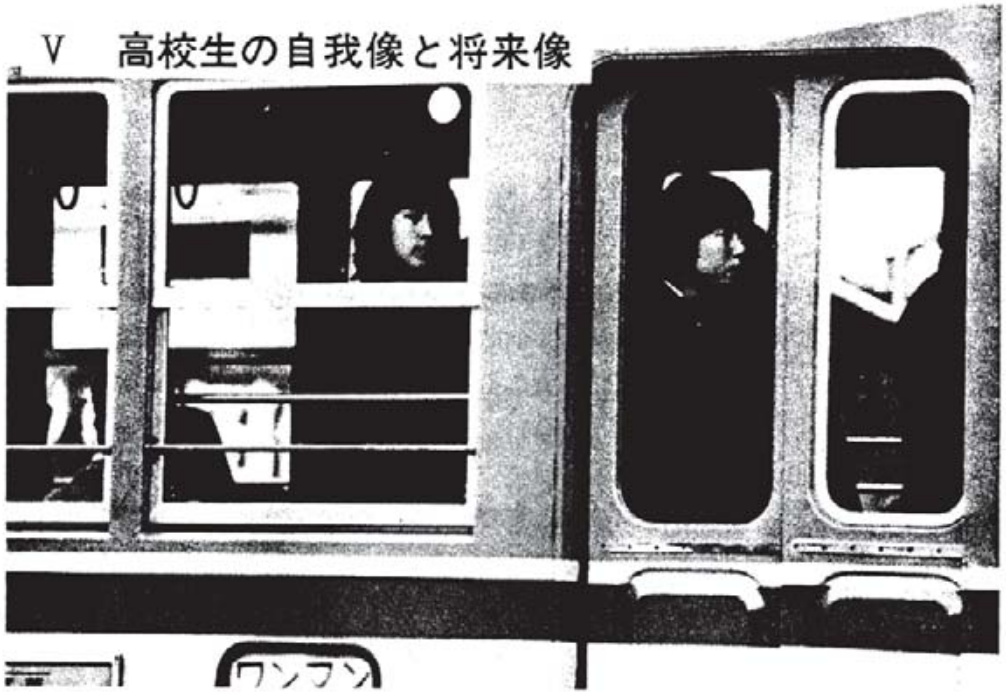
図Ⅳ—14　ユースカルチャーの許容度×Q16



最後に両群の特徴を示していると思われるデータを2つつけ加えておく（図Ⅳ—14）。

「先生ににらまれると成績を悪くつけられるかもしれないと心配だ。」「ホームルームの運営は生徒にまかせるより教師の長年の経験を生かして指導してくれる方がよい。」という2つの意見に反対だと答える生徒は，いずれも，ユースカルチャーに対する逸脱視群では少なくなっている。

V　高校生の自我像と将来像



1　高校生の自我像

高校生たちは勝手気ままに毎日を過ごしているのではない。周知のように生徒たちは，家族・先生・友人などとの日常的な交渉の過程や就職・進学といった当面の目標，および将来の家庭生活・社会生活などを考える過程で，多様な期待や要求を感じとり，それらに基づいて考え，行動しているのである。

また身近な人々との交渉のなかでは，生徒たちは「よいおとなになれ」であるとか「勉強しなさい」といった期待や要求を受けるだけではなくもう一歩進んで，「おまえは良い生徒だ」とか「おまえは悪い生徒だ」といったレッテルを貼られ，そうしたレッテルを背負って日々を過ごさなければならない。「良い生徒だ」と認められた生徒は，自分は「良い生徒である」という自我像を作りあげることで，さらに「良い生徒」へとなっていく道が開かれていく。それに対して，「悪い生徒だ」とレッテルを貼られた生徒は，自分は「悪い生徒である」という自我像が作られることによって，「良い生徒」になることが困難になり，「悪い生徒」になる道を歩まざるを得なくなることもある。

この節では，教師によって作られた生徒像を生徒たちがどのように受けとめ，それが，生徒たちの自我像形成にどのように影響しているのかを考察してみたい。

なお，ここで生徒の自我像を，教師にどう思われていると思うかという質問で明

らかにしていこうとした理由は，生徒の勉強への意欲，規則を守ろうとする気持，友人とのつきあい方などの学校生活に対する価値観や態度の多くの部分が，教師による評価をどう受けとめ，自分のものとしているかということによって決定されるだろうと予想されるからである。

1）先生からどのような生徒だと思われているか
〔遊びが好きで，友だちづきあいのよい自分〕

まず，生徒たちの自我像の全体的傾向を見てみよう。いくつかの項目をあげて先生にどう思われているか尋ねてみた。結果は表Ｖ－１に示した通りである。

表Ｖ—１　先生からどのような生徒だと思われているか

(%)

	そう思われている	どちらともいえない	そう思われていない
① 遊ぶことが好きな生徒だ	33.7	49.7	16.5
② 友だちづきあいのよい生徒だ	32.4	58.7	8.8
③ やってよいことといけないことの判断ができる生徒だ	26.8	64.1	8.8
④ 目立たない生徒だ	21.3	46.7	31.8
⑤ 校則をきちんと守る生徒だ	21.2	61.8	16.7
⑥ 本当はもっと勉強のできる生徒だ	18.0	53.1	28.5
⑦ ユーモアのある生徒だ	17.0	54.3	28.6
⑧ スポーツの得意な生徒だ	16.0	44.0	39.8
⑨ 授業中おしゃべりの多い生徒だ	13.6	35.3	51.0
⑩ 独創的な考えをする生徒だ	11.3	59.1	29.4
⑪ 反抗的な生徒だ	8.4	42.5	48.8
⑫ こつこつ勉強する生徒だ	7.8	41.9	50.1
⑬ 将来偉くなる生徒だ	7.5	47.9	44.4
⑭ クラスの中で人気のある生徒だ	6.9	63.2	29.7
⑮ この学校の誇りとする生徒だ	5.7	38.3	55.7
⑯ 成績のよい生徒だ	5.5	38.2	56.1
⑰ 異性に人気のある生徒だ	4.8	50.6	44.3

注）「そう思われている」の割合が多い順にならべてある。

ここでまず目につくことは，どの項目についても「そう思われている」と答えた者の割合が少ないことである。先生と生徒の関係が疎遠になったためであろうか。「そう思われている」と答えた生徒の割合が最も多かったのは，「遊ぶことの好きな生徒だ」(33.7%)，2番目が「友だちづき合いのよい生徒だ」(32.4%)となっている。仲間集団に関係する項目が1位と2位になっているわけである。生徒たちが，友だちとのつきあいを柱として自我像を作りあげていることがわかる。

3番目には，「やってよいことといけないことの判断ができる生徒だ」(26.8%)，5番目には，「校則をきちんと守る生徒だ」(21.2%)と道徳や校則に関する項目でそう思われていると答える生徒が多いのが目立っている。

また，生徒たちの回答のなかで，「将来偉くなる生徒だ」(7.5%)は13位，「この学校の誇りとする生徒だ」(5.7%)は15位，「成績のよい生徒だ」(5.5%)は16位と，いわば〝学校の模範生〟ともいえる項目については，そう思われていると答える生徒が極端に少ないことも明らかになっている。生徒たちの大半が，〝学校の模範生〟にはなり得ないと思わざるを得ぬ状態にあるといえる。

また最後にもう1つ，「目立たない生徒だ」が21.3%で4位と多く，「反抗的な生徒だ」が8.4%で11位と少ないなど，最近の高校生はおとなしくなってきたと言われているが今回の調査でもそうした傾向が明らかになった。

以上のことをまとめると次のようになる。

すなわち，現代の高校生の多くは自分を模範生にはなり得ないと考えている。しかし，自分は問題を起こさない，おとなしくしている高校生で，友だちとの関係もうまくやっているという自我像を描いている。

2）先生からどういう生徒だと思われたいか
〔高校生は先生に多様な評価を望んでいる〕

先生からどういう生徒だと思われたいか尋ねた結果が表V－2である。前の質問で用いた17項目のうちから1つだけ選んでもらった。この表からまず目につくことは，生徒たちの回答が各項目に散らばっており，回答数が1番多かった項目ですら15.1%にすぎなかったということである。生徒たちが先生に評価して欲しいと願う内容は多様であることがわかる。この表で注目すべき点は，「先生からどう思われているか」という質問では3位だった「やってよいことといけないことの判断ができる生徒だ」が15.1%でトップになり，第2位だった「友だちづきあいのよい生徒だ」が14.2%で2位，1位だった「遊び好きな生徒だ」は，8位以下に落ちていることである。ここでは，友だちづきあいのよさと遊び好きは区別して考えられている。

表Ⅴ—2　先生からどういう生徒だと思われたいか（上位7項目）

（%）

① やってよいことといけないことの判断ができる生徒だ	15.1
② 友だちづきあいのよい生徒だ	14.2
③ 独創的な考えをする生徒だ	12.3
④ この学校の誇りとする生徒だ	7.1
⑤ こつこつ勉強する生徒だ	7.0
⑥ 本当はもっと勉強のできる生徒だ	6.7
⑦ 将来偉くなる生徒だ	6.3

表Ⅴ—3　友だちからどういう生徒だと思われたいか（上位7項目）

（%）

① 友だちづきあいのよい生徒だ	40.9
② ユーモアのある生徒だ	18.7
③ クラスの中で人気のある生徒だ	9.5
④ 独創的な考えをする生徒だ	5.6
⑤ 遊ぶことが好きな生徒だ	4.4
⑥ やってよいことといけないことの判断ができる生徒だ	3.6
⑦ 異性に人気のある生徒だ	2.5

次に注目すべき点は，10位だった「独創的な考えをする生徒だ」が12.3%で3位となっていることである。分別があり，友だちを大切にし，しかも他の生徒とは異なる個性をもっていると認められたいのである。

3）友だちからどういう生徒だと思われたいか〔友だちにはつきあいがよく，ユーモアがあると思われたい〕

高校生たちは先生には多様な評価を望んでいるが，友だちにはどうだろうか。前に使った17項目を使って，友だちからどういう生徒だと思われたいか尋ねた結果が表Ⅴ－3である。「友だちづきあいのよい生徒だ」が40.9%と多く，つづいて「ユーモアのある生徒だ」18.7%，「クラスの中で人気のある生徒だ」9.5%となっている。これらつきあいのよさ，ユーモア，人気の3つを合わせると69.1%と全体の7割を占めることになる。最近の高校生は互いに孤立していると言われているが，少なくとも意識の上では大半の生徒が友だちづきあいをうまくやって

いきたいと望んでいる。

4）自我像の構造

先生にどんな生徒だと思われているか尋ねることを通して今の高校生が全体として自分自身を学校のなかでどのように位置づけているのか明らかにしてきた。

次に，数量化Ⅲ類を用いて高校生の自我像のタイプを作り，それらのタイプと生徒の地位・役割との関連を明らかにする。タイプを作るのに用いられた尺度(軸)は表Ⅴ－4，表Ⅴ－5の通りである。

表Ⅴ—4　自我像カテゴリーウエイト表（第Ⅰ軸）

〔自己評価尺度〕〈個有値0.235 相関係数0.485〉

↑自己評価高い	13－1	異性に人気のある生徒だ	－1.40
	17－1	この学校の誇りとする生徒だ	－1.36
	16－1	将来偉くなる生徒だ	－1.25
	09－1	友だちづきあいのよい生徒だ	－1.06
	04－1	成績の良い生徒だ	－1.03
	12－1	クラスの中で人気のある生徒だ	－1.02
	11－1	スポーツの得意な生徒だ	－0.98
	05－1	ユーモアのある生徒だ	－0.80
	03－1	こつこつ勉強する生徒だ	－0.78
	10－1	独創的な考えをする生徒だ	－0.74
		⋮	
		中　略	
		⋮	
	03－2	こつこつ勉強しない生徒だ	0.78
	04－2	成績のよい生徒ではない	0.81
自己評価低い↓	17－2	この学校の誇りではない生徒だ	1.08
	11－2	スポーツの不得意な生徒だ	1.48
	16－2	将来偉くならない生徒だ	1.56
	13－2	異性に人気のない生徒だ	1.75
	10－2	独創的な考えをしない生徒だ	1.78
	07－2	今より勉強ができることはない生徒だ	1.83
	05－2	ユーモアのない生徒だ	2.00
	12－2	クラスのなかで人気のない生徒だ	2.42

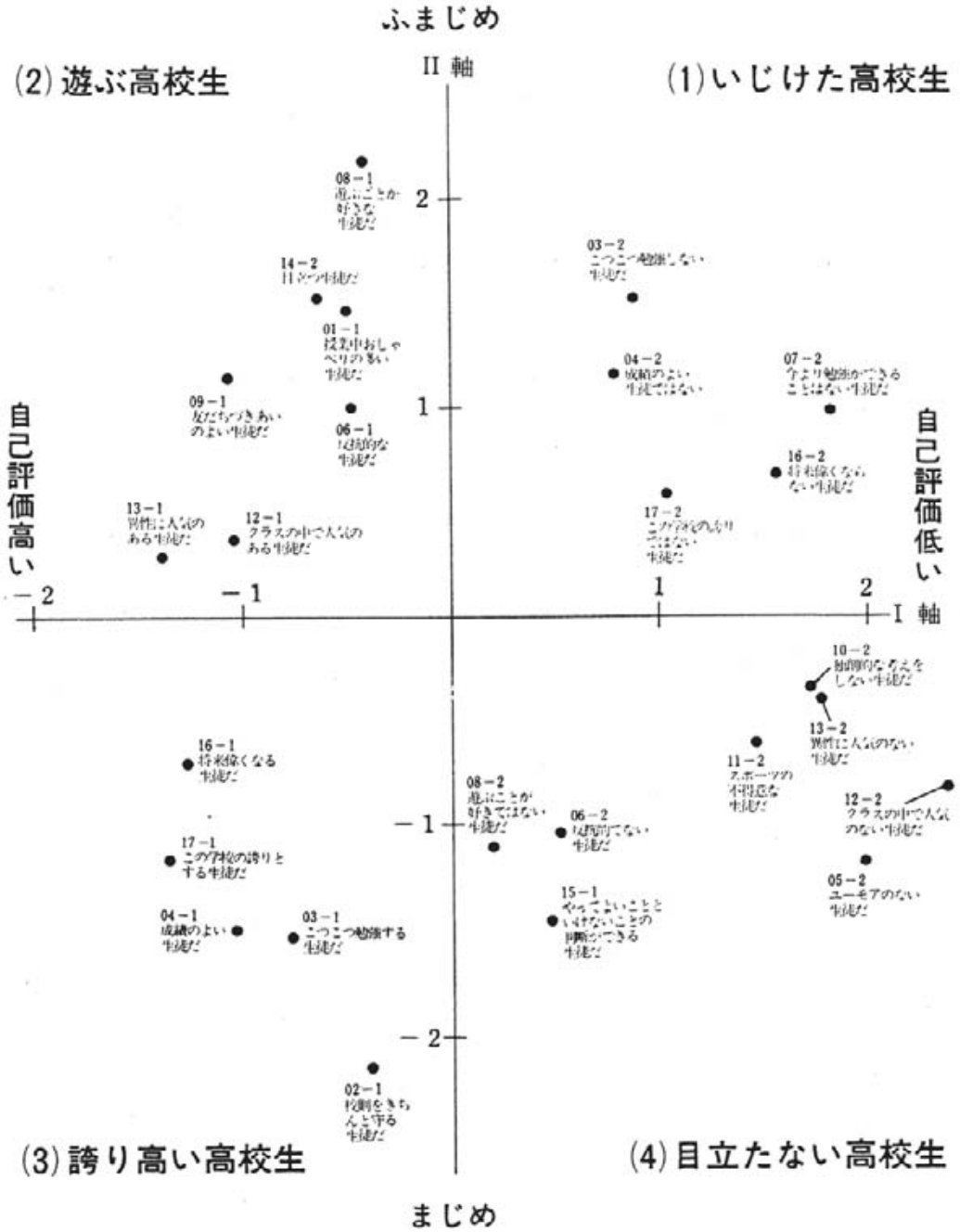
表Ⅴ－5　自我像カテゴリーウエイト表（第Ⅱ軸）

〔まじめ度の尺度〕〈個有値0.143 相関係数0.378〉

↑まじめ	02－1	校則をきちんと守る生徒だ	－2.20
	03－1	こつこつ勉強する生徒だ	－1.53
	04－1	成績のよい生徒だ	－1.50
	15－1	やってよいことといけないことの判断ができる生徒だ	－1.46
	01－2	授業中おしゃべりの少ない生徒だ	－1.43
	05－2	ユーモアのない生徒だ	－1.19
	17－1	この学校の誇りとする生徒だ	－1.16
	08－2	遊ぶことが好きでない生徒だ	－1.12
	06－2	反抗的でない生徒だ	－1.05
	12－2	クラスの中で人気のない生徒だ	－0.84
		⋮	
		中　略	
		⋮	
	16－2	将来偉くならない生徒だ	0.86
	17－2	この学校の誇りではない生徒だ	0.92
	07－2	今より勉強ができることはない生徒だ	0.99
ふまじめ↓	06－1	反抗的な生徒だ	1.01
	04－2	成績のよい生徒ではない	1.17
	09－1	友だちづきあいのよい生徒だ	1.18
	01－1	授業中おしゃべりの多い生徒だ	1.49
	03－2	こつこつ勉強しない生徒だ	1.53
	14－2	目立つ生徒だ	1.55
	08－1	遊ぶことが好きな生徒だ	2.20

第1の尺度（軸）は自己評価の高低を示す尺度であり，第2の尺度（軸）はまじめさを示す尺度である。2つの尺度（軸）をかけ合わせてグラフを作ると，図Ⅴ－1の通りとなる。なお，図中には2つの尺度のいずれかでスコアーの絶対値が1以上となったカテゴリーを抜きとってマークし，その他のカテゴリーは省略してある。

図V－1　自我像のカテゴリースコア



5） 4つの自我像

尺度（軸）の意味に着目しつつ，2つの尺度（軸）で分けられた4つのタイプについて解釈してみよう。

(1) いじけた高校生＝自己評価が低く，ふまじめな高校生たちである。先生から勉強もせず，成績も悪く，学校の誇りではなく，将来偉くなることもない生徒だと思われているだろうと考えている。

(2) 遊ぶ高校生＝自己評価は高いが，ふまじめな高校生たちである。友だちづきあいがよく，クラスの中で人気があり，目立つのだが，授業中おしゃべりが多く，反抗的な生徒だと思われていると考えている。

(3) 誇り高い高校生＝自己評価が高く，まじめな高校生。成績がよく，学校の誇りで，こつこつ勉強し，校則をきちんと守っていると見られていると考えている。

(4) 目立たない高校生＝自己評価は低いがまじめな高校生たちである。クラスの中で人気がなく，独創的な考えをせず，ユーモアがないが，反抗的ではなく，やってよいことといけないことの判断ができる生徒だと見られていると思っている生徒たちである。

6） 4つの自我像と生徒の地位・役割

学校のランク，男女，学年，成績ごとに各尺度（軸）上での平均点を（サンプル・スコアの平均点）をプロットしたのが図Ⅴ－2である。（たとえば，Aグループの学校の生徒たちは，平均するとどういう傾向があるのかということを示している。）

この図からわかることは以下の通りである。

① 学校のランクが高くなるほど自己評価は低くなる。Bグループの学校の生徒たちはAグループ・Cグループの学校の生徒たちよりも自分は先生にまじめだと見られていると考える傾向がある。

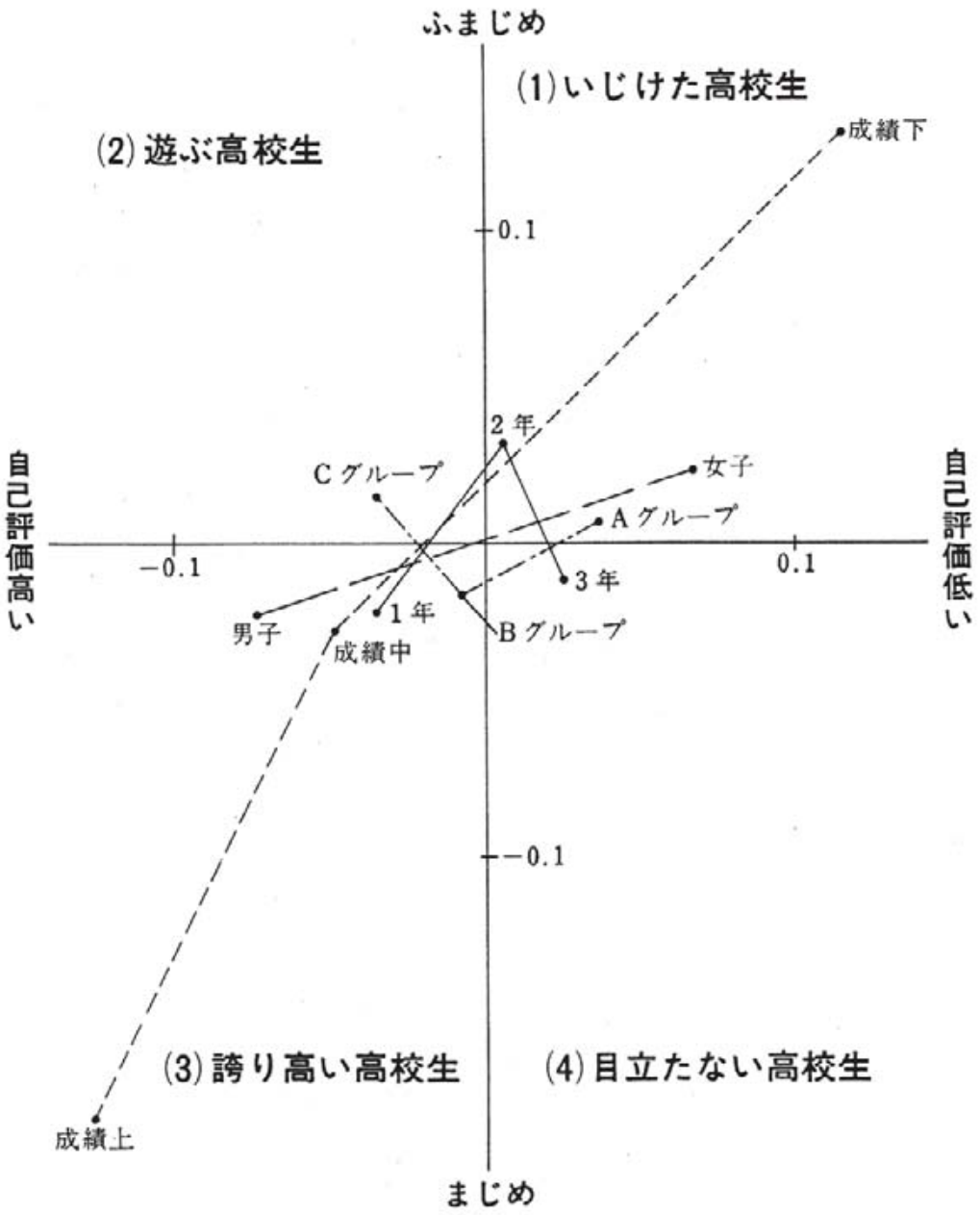
② 男子は女子よりも自己評価が高く，また，自分はまじめだと考えている。

③ 学年が進むにつれて，生徒たちは次第に自己評価が低くなっていく。①で学校のランクが高くなるにつれ自己評価が低くなっていったことと合わせて考えると，自己評価は受験による抑圧が高まるにつれ，低くなっていくものと推察される。

なお，3学年のうちで2年生が最もふまじめであった。1年生は入学したばかりで緊張しているため，また3年生は進路問題のために，それぞれまじめであるのに対して，2年生は学校にも慣れ，まだ進路を考えずにすむのでふまじめになっているのだと考えられる。

④ 成績が上位である生徒は自己評価が高く，自分がまじめであると考えてい

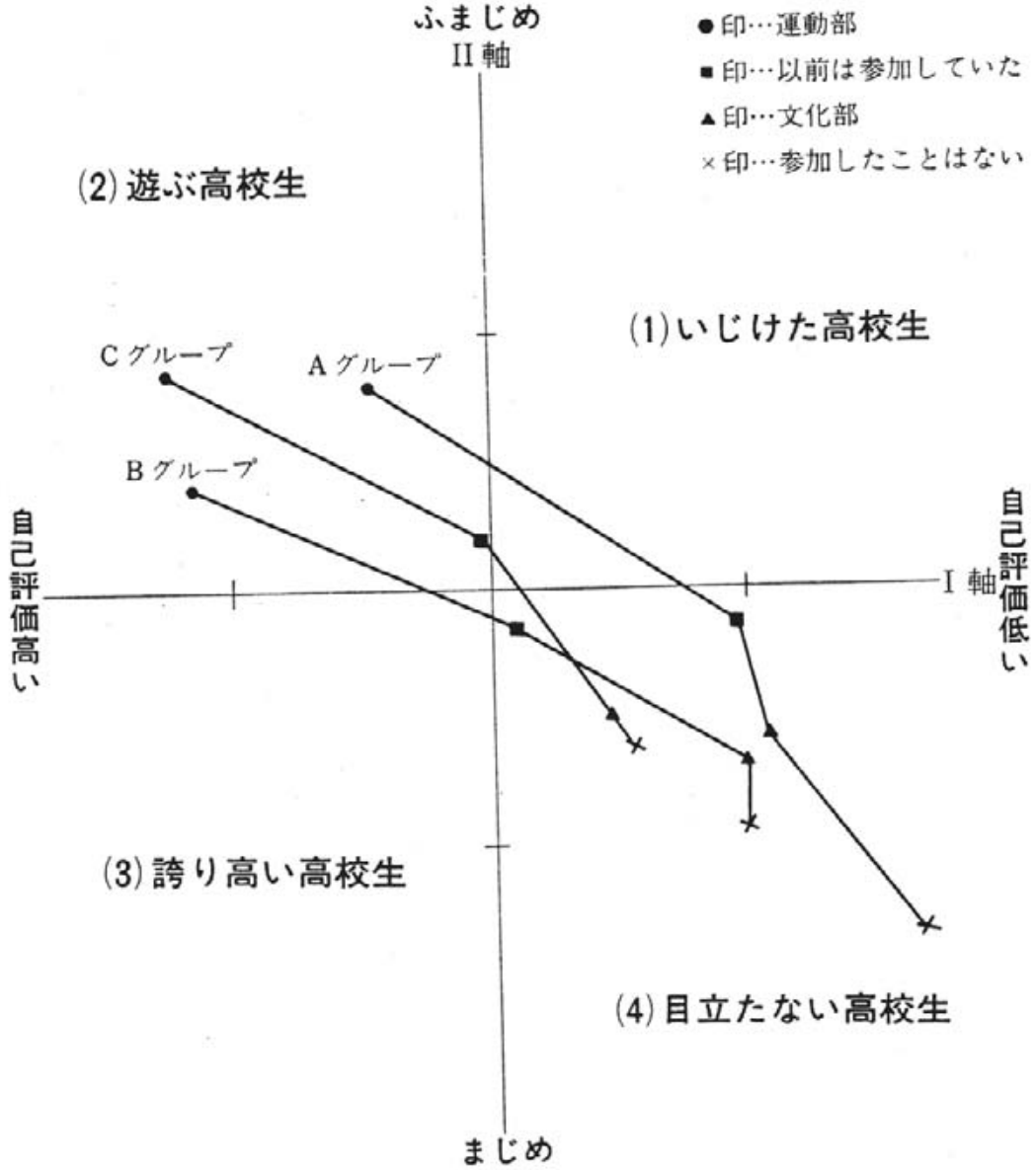
図V—2　自我像のサンプルスコア平均点



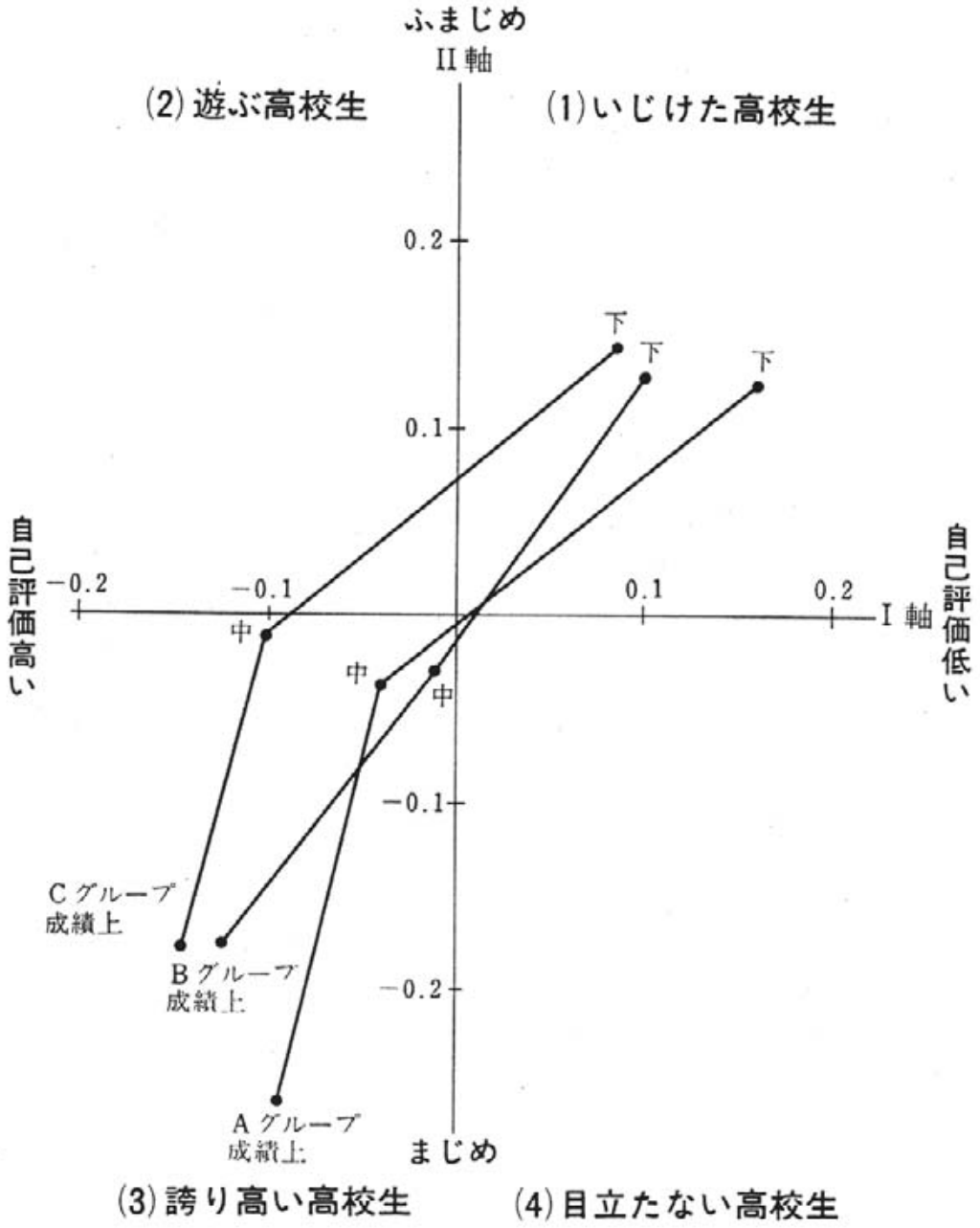
る。逆に，成績が下位である生徒は自己評価が低く，自分がふまじめであると考えている。また，成績による平均点の差異はきわめて大きい。

次に，図Ｖ－３を見てみよう。この図は学校グループ（Ａ～Ｃ）別に部活動の参加形態ごとの平均点をプロットしたものである。Ａ～Ｃ各グループとも，「運動部に参加している」生徒が最も自己評価が高く，しかしながら同時に最もふまじめに思われていると考えている。以下，「以前は参加していた」，「文化部に参加している」，「参加したことはない」の順に自己評価が低くなり，まじめに思われていると考えるようになっていく。図でみるとこれらは右下がりの線となっている。

図Ｖ—３　自我像のサンプルスコア平均点（グループ別部活動参加形態）



図V—4　自我像のサンプルスコア平均点　（グループ別成績）



これに対して，図Ｖ－４のグループ別成績の平均点を見ると，各グループとも成績がよい生徒ほど自己評価が高く，まじめに思われていると考えている。図では，左下がりの斜線となっている。部活動への参加形態別と今の成績別との平均点の動きが，斜めに十字型に交差しているわけである。具体的にみると，成績下位者が「いじけた高校生」，運動部参加者が「遊ぶ高校生」，成績上位者が「誇り高い高校生」，文化部参加および不参加者が「目立たない高校生」ということになる。

７）自己評価が高く，まじめだと自信のもてる自我像を作らせるためには

まず，自己評価を高めるためには図Ｖ－３，図Ｖ－４でみるように生徒に良い成績をとらすか，運動部に参加させるとよい。しかし，この場合成績は相対的なものなので良い成績の生徒を増やしたり減らしたりといったことはできない。ということは，生徒たちを運動部に参加させるのがうまい方法ということになる。ランクの低い学校で運動部の活発なところが多いが，受験の抑圧が少ないこととともに，こうしたことが低いランクの学校の生徒たちの方が意外にも高いランクの学校の生徒より自己評価が高かった原因になっているのであろう。

次に，まじめだという自我像を作らせるためには，同じく図Ｖ－３，図Ｖ－４から，良い成績をとらせるか，文化部に参加させる，もしくは運動部の活動を制限するといった方法が考えられよう。しかし，すでに述べたように良い成績をとらすといった方法は困難である。すると文化部に参加させるか，運動部の活動を制限するという方法をとるのがよいということになる。

しかし，ここにあげた自己評価を高める方法，まじめだという自我像を作る方法はどちらにも難点がある。すなわち，前者の場合では，ふまじめだという自我像を，後者の場合では，自己評価の低下を，それぞれ併発させてしまう。ここでは，困難ではあるが，最もふまじめ，最も自己評価の低い生徒たちですら教育的な見地からは十分満足できる，まじめで，自己評価の高い自我像をもっているような全体的状況を作り上げることが望ましい。全体の底上げを行うのである。そのための方法は，生徒たちがそれを行っていること，そうした状態でいることが満足だと思えるような公的な地位・役割を教師が組織することである。ちょうど，図Ｖ－１の「誇り高い高校生」が得ているような地位・役割を増やすことである。

すなわち，その地位・役割を得ることにより，生徒と教師との親密度が高まり，教師の教育的配慮が生徒に伝わり，生徒の自己評価も高まるような地位役割を作るのである。

2　高校生の将来像

高校生の将来像をとらえるために,「あなたは将来どのような仕事に就きたいですか」，とか「どのようなおとなになりたいですか」などといった質問がよく用いられる。これらは，生徒たちの希望する将来像を探ろうとする質問と言えよう。これに対して，今回の調査で用いた質問は，生徒たちが，描くことのできる将来像を探ろうとするものである。日本の社会風土，学校の特性，学校内での地位等によって，高校生はさまざまな規制を受け，そのなかで将来への展望を見い出し将来像を描きあげていこうとする。そうした規制がなされたなかで描く将来像を探ろうとするのが今回の質問の目的である。 その質問内容は， 近い将来から遠い将来，家庭生活から職業生活・社会生活までの広範囲にわたる将来の生活に関連する19項目である。そして，それぞれについて「努力したらそうなることが可能か」を尋ねた。項目の詳細については，表Ｖ－６（およびデータ篇）を参照されたい。これらの質問から，生徒にとってそれぞれの項目を実現させることがどのぐらい困難であるかを明らかにするデータを得，またそうしたデータを組み合わせることによって，生徒がどのような将来像を描くことがゆるされているのか理解することができた。

１）高校生の将来像・その全景

〔才能を必要とする仕事は努力しても無理〕

高校生たちは，表Ｖ－６に明らかなように才能を必要とする特殊な仕事に就くことは努力しても無理と断念している。たとえば（Ｇ）の「医師や弁護士になる」ことは努力すれば「必ずできる」，「多分できる」とする生徒は合わせて17.8％，同じく（Ｉ）「有名タレントになる」14.5％，（Ｌ）「プロのスポーツ選手になる」11.1％となっている。高校生たちにとってこれら才能を必要とする仕事は，自分から遠く離れた仕事となっていることがわかった。（Ｄ）「大企業に就職する」が努力すれば可能だとする者49.1％であることと合わせて考えると，このことはなお一層明らかであろう。すなわち，今の若者はすでに高校生の段階で現実的に将来を考えて〝不相応〟な夢などもとうとしない。そしてまた〝決められたコース〟を飛び出して行く自信がない。こういったことがこれらの数字としてあらわれたのであろう。

〔私生活を大切に生きることは可能〕

（Ｏ）「恋愛結婚をする」82.7％，（Ｑ）「趣味にあったくらしをする」82.1％，（Ｒ）「仕事と家庭を両立させる」86.2％と大半の生徒たちが努力すれば将来，満足できる私生活を送ることができると答えている。私生活を大切にできるとい

表Ⅴ－6　努力したらなれるか

(%)

	できる			できない		
	必ずできる	多分できる	小計	多分できない	絶対できない	小計
A 学年で10番以内の成績に入る	14.5	24.9	39.4	39.2	21.0	50.2
B 一流大学に入る	9.9	28.3	38.2	39.3	21.9	51.2
C どこでもいいから大学(四年制)に入る	41.0	46.1	87.1	9.9	2.6	12.5
D 大企業に就職する	10.0	39.1	49.1	41.2	9.0	50.2
E 上級試験を受けて中央官庁に入る	6.4	19.2	25.6	47.4	26.0	73.4
F 地方公務員になる	18.0	50.0	68.0	23.5	7.9	31.4
G 医師や弁護士になる	5.7	12.1	17.8	39.1	42.5	81.6
H 政治家になる	4.1	6.7	10.8	32.2	56.6	88.8
I 有名なタレントになる	5.2	9.3	14.5	36.2	48.8	85.0
J 芸術(文学・音楽・美術)関係の仕事につく	9.0	27.6	36.6	34.9	28.0	62.9
K 学者・研究者になる	6.3	19.8	26.1	38.1	35.1	73.2
L プロのスポーツ選手になる	3.4	7.7	11.1	31.8	56.5	88.3
M 自分の店をもつ	17.1	43.7	60.8	28.5	10.3	38.8
N お金持(上位10%)になる	6.1	14.0	20.5	46.8	32.3	79.1
O 恋愛結婚をする	32.8	49.9	82.7	13.2	3.0	16.2
P 外国でくらす	16.4	31.2	47.6	39.9	12.0	51.9
Q 趣味にあったくらしをする	28.5	53.6	82.1	14.9	2.3	17.2
R 仕事と家庭を両立させる	31.3	54.9	86.2	10.3	2.9	13.2
S 社会のためにつくす人になる	16.0	48.9	64.9	27.7	6.8	34.5

うこの自信が，最近言われている私生活主義の1つの支えとなっているのかもしれない。そしてまた，私生活主義の風潮がこの自信を生ませているのかもしれない。

〔地方公務員になるより難しい社会のためにつくす人になること〕

（S）「社会のためにつくす人になる」ことができると答えた生徒は64.9%であった。

この数字は，(F)「地方公務員になる」ことができると答えた生徒の割合，68.0%と比較したとき，ショックを，禁じ得ないものであった。高校生たちが，現代社会構造や学校のモラトリアム構造によって，社会生活への関与が低いであろうことは予想されていたが，地方公務員になることよりも社会のためにつくす人にな

ることの方が難しいと答えた生徒の方がわずかではあるが多かったという事実の意味するところは大きい。

2）高校生の将来像の構造

将来像を描く際に，生徒たちを規制する，彼らにとっての「将来の生活の難易度」の全体的傾向は以上述べてきた通りである。ここでさらに将来像の構造を明らかにし，また，それと生徒の地位との関連について探ってみよう。その方法として，数量化Ⅲ類を用いることにする。

〔3つの尺度(軸)〕

生徒たちは，主として3つの基準で「将来の生活」の難易度を考えていることがわかった。①野心度，②私生活志向度，③堅実度である。数量化Ⅲ類によって得られたⅠ～Ⅲの尺度（軸）が①～③，すなわち野心度，私生活志向度，堅実度を測定する〝モノサシ〟となっている（表Ⅴ－7～Ⅴ－9）。それぞれの表に，個有値と相関係数，何を測定する尺度であるかを付し，カテゴリーおよびそのカテゴリースコアを記した。

表Ⅴ－7　将来像　第Ⅰ軸

〔野心度〕　〈個有値0.262 相関係数0.511〉

↑野心度高い	H	政治家になれる	−3.42
	G	医師や弁護士になれる	−2.69
	L	プロのスポーツ選手になれる	−2.33
	E	上級試験を受けて中央官庁に入れる	−2.25
	N	お金持（上位10%）になれる	−2.04
	I	有名なタレントになれる	−2.034
	K	学者・研究者になれる	−2.026
	B	一流大学に入れる	−1.63
	A	学年で10番以内の成績に入れる	−1.36
	D	大企業に就職できる	−1.23
		⋮ 中略 ⋮	
野心度低い↓	B	一流大学に入れない	1.02
	P	外国でくらせない	1.03
	S	社会のためにつくす人になれない	1.14
	M	自分の店をもてない	1.15
	D	大企業に就職できない	1.20
	Q	趣味にあったくらしができない	1.35
	O	恋愛結婚できない	1.44
	F	地方公務員になれない	1.47
	R	仕事と家庭を両立できない	1.60
	C	大学（4年制）に入れない	1.99

表Ⅴ－8　将来像　第Ⅱ軸

〔私生活志向度〕　〈個有値0.090 相関係数0.300〉

↑私生活志向度高い（私生活志向）	M	自分の店をもてる	−1.00
	P	外国でくらせる	−0.96
	J	芸術関係の仕事につける	−0.90
	Q	趣味にあったくらしができる	−0.85
	S	社会のためにつくす人になれる	−0.81
	B	一流大学に入れない	−0.79
	O	恋愛結婚できる	−0.74
	A	学年で10番以内の成績に入れない	−0.73
	R	仕事と家庭を両立できる	−0.65
	F	上級試験を受けて中央官庁に入れない	−0.59
		⋮ 中略 ⋮	
私生活志向度低い↓（社会的地位志向）	B	一流大学に入れる	1.27
	C	大学（4年制）に入れない	1.29
	S	社会のためにつくす人になれない	1.53
	M	自分の店をもてない	1.55
	E	上級試験を受けて中央官庁に入れる	1.72
	G	医師や弁護士になれる	2.40
	H	政治家になれる	2.67
	O	恋愛結婚できない	3.74
	Q	趣味にあったくらしができない	4.10
	R	仕事と家庭を両立できない	4.20

表Ⅴ－9　将来像　第Ⅲ軸

〔堅実度〕　〈個有値0.084 相関係数0.290〉

↑堅実度高い	B	一流大学に入れる	−1.31
	J	芸術関係の仕事につけない	−1.08
	A	学年で10番以内の成績に入れる	−1.05
	F	地方公務員になれる	−0.98
	D	大企業に就職できる	−0.95
	E	上級試験を受けて中央官庁に入れる	−0.88
	I	有名なタレントになれない	−0.80
	M	自分の店をもてない	−0.76
	N	お金持（上位10%）になれない	−0.67
	C	どこでもいいから大学に入る	−0.57
		⋮ 中略 ⋮	
堅実度低い↓	B	一流大学に入れない	0.80
	D	大企業に就職できない	0.94
	R	仕事と家庭を両立できない	1.62
	J	芸術関係の仕事につける	1.86
	F	地方公務員になれない	2.13
	N	お金持（上位10%）になれる	2.60
	H	政治家になれる	2.76
	L	プロのスポーツ選手になれる	3.97
	C	大学（四年制）に入れない	4.00
	I	有名なタレントになれる	4.65

ここで，それぞれの尺度（軸）について簡単に説明しておきたい。

①野心度の尺度（表Ｖ－７）

生徒が自分の可能性を高くみているか低くみているかを測る尺度。（－）の絶対値が高いと野心が高いことを，（＋）の絶対値が高いと野心が低いことをそれぞれ示している。

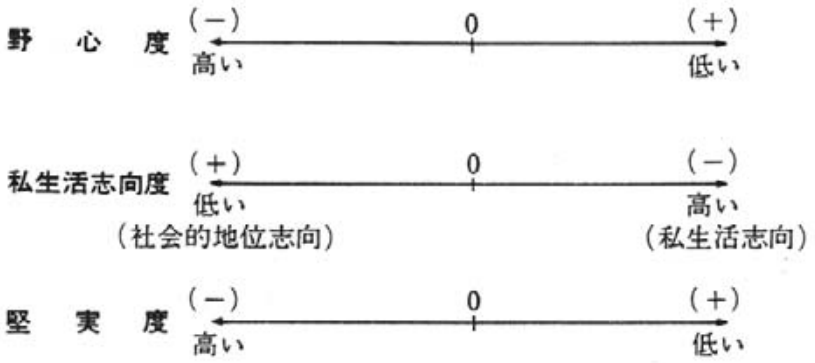
②私生活志向の尺度（表Ｖ－８）

私生活の享受を志向しているか，否かを測定する尺度。否の方は社会的地位を上昇していこうという志向がある。比喩的にいえば，「オアシスに憩う人」と「ピラミッドを登る人」の違いである。（－）の絶対値が大きいことは，私生活主義的生活の可能性が高いことを示し，（＋）方向では私生活享受の志向度が低いことを示している。

③堅実度の尺度（表Ｖ－９）

将来像の堅実さを測定する尺度である。（－）方向で絶対値が高くなるということは，堅実な将来像を描くことができることを―堅実度が高いことを―（＋）方向では夢やロマンのある将来像を描くことができることを―堅実度が低いことを―，それぞれ意味している。

図Ｖ－５　将来像　３つの難易度尺度



３つの尺度（軸）を整理すると，図Ｖ－５のようになる。生徒たちは，それぞれの野心度，私生活志向度，堅実度の度合いに応じて，それぞれの将来像を描いていくわけである。

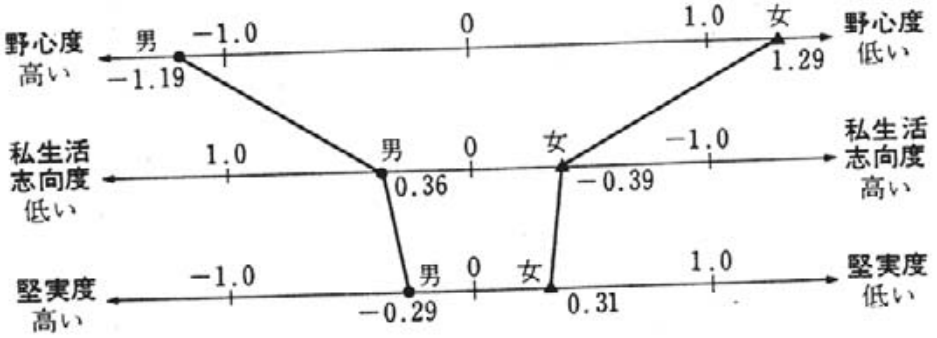
〔３つの尺度と生徒の地位・役割〕

前節でおこなったように，男女・学年・成績ごとに各尺度（軸）上での平均点をプロットし，それぞれの属性をもつ生徒たちがどういった将来像を描いているのか探ってみよう。

①　男子生徒は女子生徒よりも野心が高く，非私生活享受型で，堅実度が高い

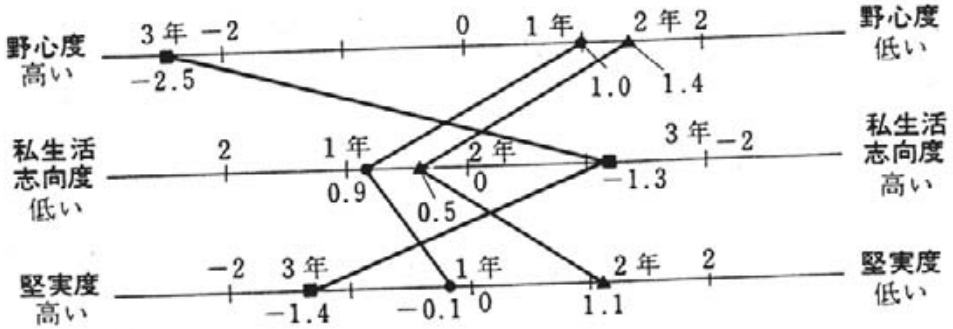
（図Ｖ－６）。とくに野心度については性差が大きい。女子よりも男子の方に有利にできている現代社会のあらわれであろうと思われる。また，学校の中にも男子に有利な状況があることもこうした結果を招いた理由であろう。前節，自我像でみたように，男子生徒の方が自己評価が高く，まじめであると思っている。しかしながら，データ篇にもあるように男子は女子よりも（自己申告ではあるが）成績がよいということも影響していよう。

図Ｖ－６　将来像×性別（×10^{-1}）

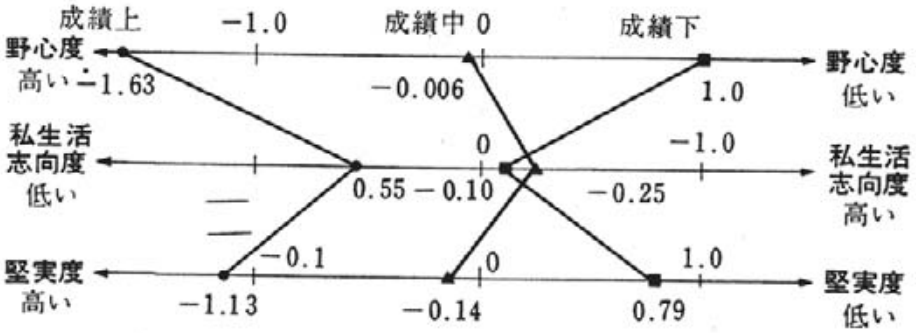


② 将来像と学年との関係については図Ｖ－７に示した通り，学年ごとの差異は小さい。３年生が最も野心が高く，また最も堅実度が高いが，私生活志向度も最も高い。これにたいして２年生は野心度と堅実度が最も低く，また１年生が私生活志向度が最も低くなっている。１・２年生とくらべると，３年生は自分の可能性を信じているが，自分は趣味や気持を大切にすることができる人間であると考えている。そしてまた，堅実な人生を送ることができると考えている。

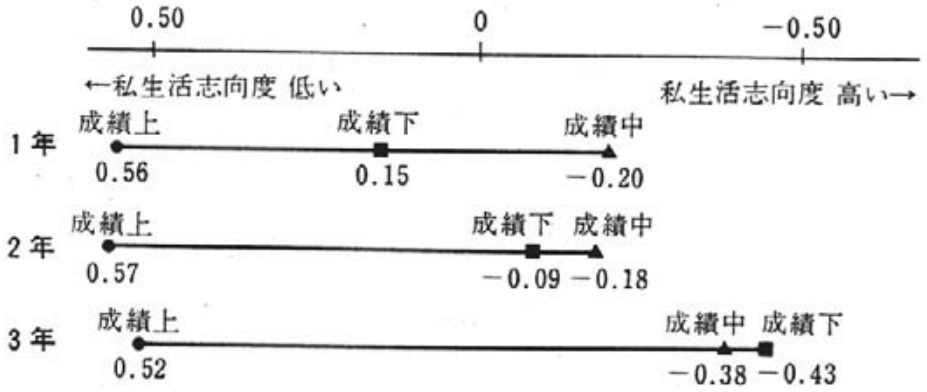
図Ｖ－７　将来像×学年（×10^{-1}）



図Ⅴ－8　将来像×今の成績（×10⁻¹）



図Ⅴ－9　私生活志向度×学年別今の成績



③　今の成績との関係では（図Ⅴ－8），成績上位者が野心が最も高く，同時に最も堅実で私生活主義度は最も低い。学年別の3年生（図Ⅴ－7）と成績上位者のサンプルスコアの平均点の布置を比較してみると，野心度と堅実度については同じ傾向にある。しかしながら，私生活志向度については3年生では私生活主義的傾向が強く，成績上位者では逆に低くなっている。巻末のデータ編のQ12「あなたの今の成績は……」で，自分は上位だとする者の割合は1年生13.9%，2年生25.1%，3年生29.2%と3年生が一番多くなっている。だとすると，三段論法でいけば，「3年生には成績上位者が多い。成績上位者は，私生活志向度が低い。したがって，3年生は私生活志向度が低い」ということになるはずである。

学年別に今の成績ごとのサンプルスコアの平均点の布置を図Ⅴ－9に示した。この図をみると三段論法のどこに誤まりがあったかが明らかになる。すなわち，各学年とも成績上位者は同じ程度の私生活志向度を示しているが，成績中位者・下位者については3年生では他の学年とくらべて極端に私生活志向が高くなっている。その結果，3年生全体の平均点は他の学年より高い

私生活志向を示すことになるのである。このことは，学年が進むと，自分の学業成績の限界がしだいに明確となり，学歴社会の存在を前提とする風潮のなかで，成績中・下位者はピラミッドを登る出世を断念していくことを意味しているのであろう。とくに成績下位者に顕著にこの傾向があらわれている。